毎月十日廿五日發行

家庭雑誌

壹冊定價金五錢



明治三十年七月十日發兌

第百五號

口絵＝稚足姫
社説＝人さ罪
田園雑典(褒)　不二行者
山むぐら(三)　太田玉茗
苦樂(下)　勝間禪夢
猫の仇討(上)　園部紫嬌
家政＝壽命さ食物、白粉、自家療治八件、石像の殘昔、斬首術(理學的手品)、夏の雞卵、モートエキストラクト、胡麻の皮、社交一斑＝(流行案内)團扇、岐阜提灯、時計、指環、眼鏡、沈香木さ堆朱櫛、寄書百珍＝家庭避暑　雜錄＝婦人矯風會事業(三)　歐死、交詢等

夏期愛誦書

國民小說

既刊八冊

第一より第八(第五のみ廿錢)迄各一冊定價十五錢。郵税各(第二のみ六錢)一冊四錢。

目次

◉第一卷 ○一口劍(幸田露伴)○細君(春の屋主人)○舞姬(鷗外漁史)○其夜(饗庭篁村)○蝴蝶(美妙齋主人)○楠木(學海居士)○流轉(北邨散士)○新編破魔弓(南翠外史)○拈華微笑(紅葉山人)○大東號航海日記(思軒居士譯)

◉第二卷 ○伊太利の囚人(森田思軒譯)○夢現境(嵯峨廼舍主人)○空蟬(同)○罔雨(南翠外史)○あひゞき(二葉亭四迷譯)○航海小說雜武烈號(鷲濤生譯)○懺悔(賣薪生譯)○曇天(抱一庵主人)○石美人(白水居士)○落武者(湖處子)○空屋(西邨隱者)○惡因緣(鷗外漁史)○地震(同)○うきよの波(同)

◉第三卷 ○霜柱(饗庭篁村)○川達會社(思軒居士)○吾亡妻(宮崎三昧)○明月(抱一庵主人)○老人物語(愛山生)○巨人石(麗水生)○村落小記(湖處子)○宿魂鏡(透谷子)○夏の夜かたり(敬亭生)○雛姬(若松賤子)○女丈夫(鷗外漁史)○迷の夢(櫻痴居士)

◉第四卷 ○千人會(思軒居士譯)○何處に(嵯峨のや主人)○離の菊(小中村義象)○七株松(落合直文)○末期の言(鷲濤生譯述)○不二の高根(麗水生)○懺悔(秋風閣主人)○家妻(湖處子)○白薔薇(書湖仙史譯)○夏休(嵯峨のや主人)○田家新年(麗水生)○物語の物語(秋山生譯)○千島大尉(弦齋居士)○盲新婦(槐夢南柯)

◉第五卷 ○恩愛刄(落合直文)○夏(德富健次郎)○すみれ日記(漣山人)○鶴が無事(湖處子)○三國物語(小杉天外)○その曙に(嵯峨のや主人)○不思議の家(蘆花逸生飜案)○革羽織(金子春夢)

◉第六卷 ○名曲クレーツエロワ(トルストイ作、小西增太郎、尾崎紅葉譯)○花あらそひ(AB子)○浮沈(枯葉山人)○うき島の荒浪(金子春夢)○覿面(緑雨)

◉第七卷 ○寛政中の世界環航者(思軒居士)○うらおもて(眉山人)○菊のながめ(恕哉)○恐ろしき一夜(蘆花生)○嫁形氣(嵯峨のや主人)○初戀の記(森愛軒)○訪はぬ墓(敬亭生)○この馬鹿(嵯峨のや主人)○脱營兵(松居松葉)○靴師(トルストイ著、小西增太郎譯)○自然兒(湖處子)○支那問罪義經仁義主汗(櫻痴居士)

◉第八卷 ○高麗陣博多聞書(愛山生)○炭燒の煙(江見水蔭)○老武者(蘆花生譯)○のろひの木(天知)○初霞(金子春夢)○庖廚(二十三階堂)

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

抒情詩

定價貳拾五錢
郵税四錢

批評一斑

●●●●教育時論　作者は、宮崎、田山、松岡、太田、矢崎、國木田の六氏。收むる所は、新體詩を以て作れる抒情詩、往時の所謂新體詩に優る數等。されど所々に挿める序文こそ、新體詩の歷史及新體詩に對する諸氏の意見を徵するに足るなれ。

●●●●福音新報　清楚平淡讀みて服味を覺へず。之を羽衣桂月諸人の詩に比すれば頗る愛すべく又天地の廣きを見る。但惜む所を言へば予はこの詩集を讀みて詩人の性情か予か腦裏に印象を留めたるを覺へず。又詩人か言はんとして言ひ足ざる餘情に感動することなかりき(固よりこの詩集にのみ責むべきにはあらざれど)。概して之を言へはこの詩には戀愛ありて友情なし。悲哀によりて自ら淸むる男子の心に乏し。花袋氏の序文に「諸子はこの女性と戀愛との中にある多福の詩人なり」との音は詩人の心に遠きものと謂はざるを得ず。且平淡は可なり、然れども平淡の境より穿き門を潜り一路曲折心の機微に入る所なくんば未だ抒情詩の本色を發揮したりと謂ふべからず。この詩集既に一貫せる特色ありとせば之を以て民友社の詩と見做し、この社の人々の信仰思想の程合と思ひ比ぶれば面白き敎訓を得ることなきにあらざるべし。

●●●●山陽新報　題して抒情詩といふ松岡國男、矢崎おむろ、太田玉茗、宮崎湖處子、田山花袋、國木田哲夫諸氏の新躰詩を輯錄したる者にて各作者の自序あり略其意見をも伺ふべく詩亦面白きものあり中に挿む所の論亦美くしく新躰詩論の喧しき今の世探て讀む者多かるべし

發行所　民友社
東京市京橋區日吉町四番地

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發発

定價		地方郵税共
一冊	金五錢	金五錢五厘
半年(十二冊)	前金五十錢	金五十六錢
一年(廿四冊)	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰一回ニ付)金八錢
○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

發行兼印刷人　吉崎國吉
編輯人　金子佐平

本社電話番號本局七十番

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

明治三十年七月十日發行

家庭雜誌第百五號

目録

口繪
稚足姫(久保田米齋)……

社説
人さ罪……一

文藝
田園雜興(六)詩……不二行者…四

小説
山むぐら(三)……太田玉茗…八

談叢
苦樂(下)……勝間舟夢…一一
猫の仇討(上)……園部紫嶍…一五

家政
壽命さ食物……黑田生…二〇
白粉……同…二五
自家療治八件……二六
石像の發言……二八
斬首術(理學的手品)……二九
夏の雞卵……二九
モートエキストラクト……三〇
胡瓜の皮……三〇

寄書百珍
家庭的避暑法……三一

社交一斑
流行の薬……流行子…三四
團扇……三四
岐阜提灯……三五
時計……三五
指環さ眼鏡……三六
沈香木さ堆朱の櫛……三七

雜錄
婦人婚風事業(三)……ウイラード女史三七
其命名……三七
會の格言……三八
徽章……三九
稚足姫(口繪解説)……三九
盂蘭盆の贈物……三九

歌苑……四一

交詢……四二

第九卷總目録





社説

人と罪

彼も人の子也、同じく溫柔なる母の懷に抱かれしこともあるべく、同じく可憐なる弟兄姉妹と戯れしこともあるべく、同じく天日を戴き、同じく大地を踏み、同じく帝王の胸腹中にも出入しつゝある大氣を吸ふ。而して或は晝猶暗き鐵窓の下に呻吟するあり。或は竹笠破衣鐵鎖四肢を繋で祁寒暑雨苦役に服するあり。或は百年の命を故意を以て絞臺上に取り去らるゝあり。人界の悲惱これより甚しきはあらざるべし。悲むべく痛むべきは實に罪と罰とにあらずや。

人のふりを見て我がふりを直せ、世に斯る不幸者のあるは我に取りてはよき龜鑑也、自ら恐懼愼戒して決して此の恐ろしき淵に沈むべからざるは言ふまでもなく、最も注意して可愛の子女を此の淵に進むべき忌まはしき慣ひに染ましめざること實に父母たるものゝ職分第一ならずんばならず。

世の罪を悪み罰を悪むものは、先づ人と罪との關係を詳にし、以て其愼戒恐懼すべき所以を知らざるべからざる也。

如何なる境遇如何なる事情の人にして、最も多く罪を犯す乎。請ふ先づ罪と年との關係を見よ。

罪と年との關係（廿六年度）

	重罪被告人	囚人出監の時改悛有無の徵効百分比例	
		有	無
十二年未滿	一七	……	……
十二年以上十六年未滿	一三六	三二、〇一（十六年未滿）	六七、九九（十六年未滿）
十六年以上二十年未滿	三五三	三四、七一	六五、二九
二十年以上三十年未滿	一、二四二	三八、五七	六一、四三
三十年以上四十年未滿	八二二	四一、四三	五八、五一

四十年以上五十年未滿	四七五	四四、七七	五五、九三
五十年以上六十年未滿	一四四	四八、五五（五十年以上）	五一、四五
六十年以上	八二	……	……
不詳	……	五〇、〇〇	五〇、〇〇
總計	三、二七一	四〇、三八	五九、六二

明治廿六年度に於ける重罪被告人を見れば、二十歳以上三十歳未滿のものにして最も犯罪者多きを知り、三十歳以上四十歳未滿のもの之に次ぎ、四十歳以上五十歳未滿のもの更に之に次ぎ、十六歳以上二十歳未滿のもの亦之に次ぐを知る。若し囚人にして出監の日に改善の徵有りたるもの又はなきものにつき其百分比例を見れば、改善の徵有りたるもの丶最も多きは、五十歳以上のものにして、次は四十歳以上五十歳未滿のもの次は三十歳以上四十歳未滿のもの、次は二十歳以上三十歳未滿のもの、次は十六歳以上二十歳未滿もの、次に十六歳未滿のものたるを知る。恰も年齡の多少と正しき比例をなすに似たり。改悛の効なきものは、實に之に反比例す。

罪と富との關係を見れば、

囚人出監の時改悛有無の徵効百分比例と富との關係（廿六年度）

	有	無
資産ある者	五三、九〇	四六、一〇
資産なき者	三七、八八	六二、一二
不詳	四七、八〇	五三、二〇
總計	四〇、三八	五九、六二

にして、囚人出監の日改悛の徵見へたるもの、有資産者は半より稍多けれども、無資産者は纔に三分の一許のみ。所謂恒産なきもの恒心なきを知るべき也。

罪と教育との關係を見れば、

罪と教育の關係（廿六年度）

	重罪被告人	囚人出監の時改悛有無の徵効百分比例 有	無
文字を知る者	一八二五	四五、二八	五四、七二
文字を知らざる者	一四二四	三八、三九	六一、六一
不詳	二二	四六、三一	五三、六九
總計	三二七一	四〇、三八	五九、六二

にして、單に其人數より見れば、重罪被告人の如き有

教育者無教育者其數多し。然れども是れもと國民中有教育者――少なくも文字の幾分かを知る者――の無教育者――全く文字を知らざる者――に比し、非常に多數なるにより、自然犯罪者も多數なるを意味するのみ若し四人中改悛者の多少につきて之を察せん乎、有教育者は百人中四十五人二八なるに、無教育者は纔に百人中三十八人三九にして、明に罪と教育とは互に反比例をなすものなることを知るべし。

更に罪と父母との關係につき之を察するに、父母の存在はたしかに人をして罪より遠ざからしむるものなるを見る。

囚人出監の時改悛有無の徵効百分比例と父母との關係（廿六年度）

	有	無
父母存在	四二、六四	五七、三六
一親存在	三九、六七	六〇、三三
父母死亡	三九、二六	六〇、七四
棄兒	六、四五	九三、五五
不詳	五〇、〇〇	五〇、〇〇
總計	四〇、三八	五九、六二

改悛者の最も多きは二親の存在するものにして、一親なりとも存在するもの之に次ぎ、父母全く亡きもの之に次ぎ、棄兒の如きは囚人百人中改悛の徵を見るべきものは只六人四五あるに過ぎず。人固より罪なし、不幸は人をして罪に親ましむるものにあらずとせんや。

再び一歩を進めて罪と配偶との關係を見ん乎、

罪と配偶との關係（廿六年度）

	重罪被告人	囚人出監の時改悛有無の徵効百分比例 無	有
未婚	一六二八	三五、一八	六四、八二
配偶者	一五二七	四五、〇九	五四、九一
失配偶者	七四	三九、三三	六〇、六七
不詳	四二	五〇、七〇	四九、三〇
總計	三二七一	四〇、三八	五九、六二

即ち其數より見れば、未婚者最も多く有配偶者之に次ぎ、無配偶者の犯罪最も少なし。蓋し無配偶者の犯罪少なきにはあらざるべし、無配偶者の少なきのみ、

故に改悛者につきて之を見れば、有配偶者は最も多く罪を悔み、失配偶者之に次で罪を悔み、未婚者最も少なく罪を悔ゆるを知るべき也。罪と幸福とは常に相善からざるが爲めにあらずや。

之を要するに所謂罪なるものは、未婚者棄児無教育者無資產者等所謂幸福なるものと相親まざるものにして世と相知ることの淺き年少者に於て最も密なる關係を有するものなるを見るべし。而して比較的に年少者にして而も犯罪資格の最要件たる躰力強き時代、即ち二十歲以上三十歲未滿を以て、實に犯罪の最も多き時代なりとなす。

罪と人との關係にして果して此くの如くなるを知らば世人須らく自ら顧みて嚴しく罪を避くべき道を講ずると共に、其子女等をも併せて決して罪に走らしめざるやう十分に之が方策を講ずるを要す。是れ人類の義務なれば也。

文藝

田園雜興（六）

不二行者

花の頃はおもひすてたるときは木の
　蔭こそ夏はすゞしかりけれ

と隆正の歌ひしは、折ふしの天然に對するなべての人情をよく言ひとり得て、はた天然の人に於ける微妙なる恩惠の意を窺ふべし。

觀るに花の色香あり、聽くに鶯の音律あり、遊ぶに踏青の野與あり、蝶と戯れ蜂と狂ひて、心はその歡をきわめ、情はその樂を盡したる春の、何時か行迹も知らず別れ去る粉愁紅恨のはかなさに、世に賞心樂事の料は此に盡きけんと思ふ程もなく、小袖に換はる單衣、

夏はやがて天然の衣を更へて新らしき面影を現はし來る。

美しき花こそ無けれ、優しき鶯こそ鳴かね、蝶老い蜂長けて、野も山もまた春に逢ひたる時の如く、心ゆき神浮ぶ興こそ無けれ、樹々の葉の緑なる、その枝に果實の青やかに累々たる、青田一面に涼風を含んで蛙の唱歌、夕の月を祝ぎ、清流石に私語きて岸に生うる露の叢に、螢の光ありて夜の暗を飾る。田園到る處に賞心の樂事多く、天然が人に給する慰安の精神は、夏もまた春と異なること無し、春をもて夏にかへ難く、夏をもてはた春にかへ難し。「梅の香を櫻の花、柳の枝になどゝは思ふまじきとなり、花の紅、柳の緑、心をつけて樂むべし」とぞ樂翁は言はれける。此心をもて春の天然に對し夏の天然に對し、さては月にも雪にも折ふしの天然にわれ等の情を寄すべきのみ。

是にわれ等はまた物の天賦なる分限を知る。「生や薄命に非ずんば花を成さず」とは清の詩人袁隨園が落花を詠じたる辭句なるが、これまことによく眞宰が天然の風物に賦與せる分限の奧妙なる意を言ひ顯はせるもの明日火に投げ入れらるゝはかなき草にだに、美しき色香妙なる花を開くも、また此意義より發するものなるを知る。眞宰は天然にこの分限を與へたり、さればまた權力を與へたり。美しきは花の權力なり。薄命なるは、花の分限ならずや。われは天然の春夏秋冬花鳥風月草木禽獸蟲魚に對するとき、恒にこの權力と分限との表現を觀て、これを愛しこれを感得す。されば美しき花を觀てその權力を思ふと共に、また醜き昆蟲の上にも同じ意もて、分限の裡自から美しく感ずべき人を慰め人を喜ばしむる一の微妙なる權力あるを認む。田園の夏の夕暮、われわが後園に逍遙してかの蟲に對せるときの心情はまたなほこの心情にてありけむ。

家宅の後園を劃りたる竹籬の傍、栗の大樹あり。幾年

の幹風雨に古りて、苔蘚その根を埋め、蕗、茗荷のところ狹きまで繁く雜草と生ひて、草叢は一隅の地を占めたり。小流その傍を屈曲して淸くして淺し。

晚涼を浴後の衣にうけて、無心に樹蔭の綠嵐を帶び、その流泉の歎ぶが如き聲を聞きつゝ小立む。牧童は草刈籠に桑萸果、梅實を併せ収めて家路に歸り、野翁は杖を携へて瓜畑の茅庵に夜警に赴く、雞雛塒に憩うて既に母鷄の腹に眠らむとす。黄昏の景色漸く近く、日既に沒して天なほ明かし。やがて蛙鼓は靑田にうちはぢめ、蚓笛は草間の壞に吹かれ、かれらはその自然吹奏の樂をもて夕を送りて夜を迎へんとするなり。此時蟇は何處よりか出で來り、栗の根近き靑石の蹯屈せる陰に坐せり。玄黃き滿身肥え膏つきて、皴皰浪の如く背に刻まれ、疣瘤その間に起伏し、淡黃にして白點の斑らなる便々たる腹を、左右に張れる太く短き雙手に支撑へ、山高に突起せる瞼の下に、紅纈に環どれる圓き眼を濶と瞠きて、栗の梢を仰ぎたり。

かれは栗の梢に巢へる「テンス」と稱する野蠶の時ありて落下るを食はむとて待てるなり。寂然として大氣を呼吸し、便々たる腹の微かに浪を打て搖く態、さながら天を睥睨みたる風情、唯一箇の昆蟲とは思へぬまでに一種の威容を具ふ。近づきて靜に之に對ふにかれは泰然として動かざる一ッの岩の如し。試に傍の草叢を搜りて芋蟲の如きものを捕へ、そを竹なんど棒先に挿みて、かれの口頭にさしいだせば、岩の如き頭顱はやがて搖ぎ、眼を一層瞠き身を少しく俯して、獲物を凝視ると良久、その食ふべきを認むるや、俄然として大なる口を開くと見る間に、直下に竹頭の芋蟲はその便腹の中に嚥下さる。その舌は鮮血よりも深紅に、その唇を結ぶ音は、さながら喝するが如し。嚥み了るや眼を閉ぢ頭を垂れて少時休し、やがて復び前の如く雙眼明かに岩の如き頭を昻然とあげて、悠然自若、意氣を

を帶びて坐せり。かくすること數回に及べば、かれは人の手に依て餌に充てるを滿足するが如し。人の傍に在ることを曾て關せざるが如し。若し一旦その身に觸るゝとあれば、かれは初めて迷惑せる態にて惶懼の狀あり。今まで具へたる威容は一時に消えて、さながら興醒め容に遲々として暗き方にかくれ去る。天地はやがて夜の色濃く、蚯蚓の笛、蛙の皷頬に喧嘩にして、かれの行迹は痕なく暗黑に鎖されたり。

次の日の夕われまた流の邊に蚯蚓の笛と蛙の皷とを聞きつゝ立てば、かれまた栗樹の下に悠然として坐すると昨の如し。日また日、夕また夕、われとかれとは無言相對の友となりぬ。その後或は見え或は見えず、後は見ゆると少く在らざると多くなりて、後終に見えずなりぬ。蕗の叢を搜せども、蘿の根をもとむれども、かれの居は竟に知られずして隔年の別となりぬ。しかしてその次の年の夏の夕、われはまた去年相見たると同じきかれに、同じく栗樹の陰に相見ぬ。依然として岩の如きその躰軀、悠然として寛ぎたるその態度、まことに自然にして邪氣無く、寂默として黃昏の天地に大氣を噓吸し坐す、あはれ眇たるかれはさながら天賦の性を具して、天與の浩然の氣を養ふに似たりけり。此時に於てわれ深く眞宰の與へたる物の上の權力と分限とを覩る。

昔人の一話、龍王と蛙との物語ありき。龍王一日蛙に海の濱に逢ふ、蛙問ひけるは、王の在す所は如何、龍王の曰へらく、わが居る處は珠の樓臺、貝の宮闕、珊瑚の欄干、琅玕の柱梁、汝の居處は如何。蛙答ふ、わが居る處は綠苔碧草、泉清く石白し。龍王の喜びはた怒るときは如何。龍王が曰く、われ喜べは時に膏澤を降し、五穀をして豐稔ならしむ。怒れば則ち之に先んずるに暴風を以てし、之に濺ぐに飛電を以てし、千里の内をして寸草だも留めざらしむ。汝の喜怒は則ち如

何。蛙答へて曰く、われ喜べば月明かにして萬頃の青田、清風の涼萬斛、一部の皷吹あり。怒れば即ち之に先ずるに努眼を以てし、之に次ぐに腹脹を以てす、わが爲す所此に安んじ此に休すと。而して後龍王と蛙とは相分れて去りぬと。われ茲に於て此物語の味あるとを覺ふ。鳥の聲、花の色、蚯蚓の笛、蛙の皷、それとひとしき天然の情を、われは蝦蟆の擧動に見て、限無き夏の夕の樂しきを知りたりき。

小説

山むぐら

太田玉茗

（三）

妹は菫を墓前に供へる。兄は閼伽桶へ水を汲むで、さうして花筒へ灑ぎかける。可愛い小さな手を合せて拜む殊勝の其あはれさ、地下から母が見たことであるなら、不愍のものやと泣くであらう。

妹は寺の軒下から、一枚の蓆を見つけて來て、それを墓前に布くや否や、

『兄様こゝへお坐りよ、けふは飯事して遊ばう、妾がお母様の法事をすると、兄様はお客で呼ばれに來るの、可いかい兄様。』

さう言ひながら樂しげに笑つて、小さな玩弄物の勝手道具を、袂の中から取出した。それは鎭守の祭禮の日に、老爺に買つて貰つたので、いつも戸外へ出る時には、必ず大事に携へて行く。

手鹽も皿も茶碗もある、庖刀も眞名板も揃つてゐる、そこで菜の葉やおばこの葉や、芳花や菫の花を刻むで、煮るまね燒くまね湯出るまねして、盛つて一膳を墓に供へる、又一膳を兄に据える。

『まこと何にもございませぬが、さあ〳〵おあが

りくださいまし。』と極おとなびて眞面目に言ふ。
兄も初めは妹にむかつて、飯事なんどはつまらないから、よさうぢやないかと言つたのであるが、兄樣しやうよ仕て頂戴よと、ねだりにねだられて爲る氣になつた。さすがに爲る氣になつて見れば、何だか非常におもしろいので、
『それではお頂き申します。』といかにも旨さうに食ふまねする。
『さあ／＼お代り、さあお代りを。澤山おあがりくださいまし。』
おつかけ／＼妹はすゝめる。
『もう／＼澤山いたゞきました、少しも御遠慮致しませぬ、本統に充分いたゞきました。』
『いゝえまだ／＼あがれませう。誠に何もございませぬが、おしるしばかりもう一膳。』
などゝ饗應のまねしてゐたが、日暮となつたものであるから、跡をかたづけて家へ歸つた。老爺は家に待ちかねてゐて、
『お前らは何處へ行つてたんだ。どこを搜しても居らないから、己あ本統に心配したよ。腹が空いたらう、おまんまを食べろ。』
二人に膳をすゝめた上、
『明朝はお前ら行くのだから、顏から身軀を拭いてやらう。婆やお湯をとつてくんな。』
妻は頷いて茶釜の湯を、盥にあけて支度をする、老爺は子供を裸躰にする。膚は雪をも欺くばかりで、玉の如くに滑らかであるから、立つて並むだ其姿は、女雛男雛の一對である。
老爺はやう／＼拭き終つて、もとの如くに着物をきせ、前に坐らせて二人に對つて、共に辛抱せねばならぬ、よく言ふ事を聞かなければならぬ、惡い事をばしてはならぬ、何でもえらい人になれと、繰返し／＼懇ろに

説く。

妹は怪しげに老爺をながめて、默つて坐つて聞いてゐたが、兄は進むで老爺にむかつて、

『僕が年季に行くところは、伯父樣どんなところなの。』

して又何處だと行先を尋ねる。

『どこだつてお前は知るまいがな、東京と言つて立派なところで、本統に賑やかな町だによ。』

『それでは川越見たやうかい。』

『川越どころの話しぢやない。川越を五十聚めたぐらゐの、大きな賑やかなところだよ。』

『さうかい、そんな大きなところかい。』

先づ膽魂を拔かれたので、小さな胸にはどんな處か、疾く見たいの好奇心が起る。

『さうさ大きな處だから、お前は吃驚してしまうよ。老爺も初めて見た時には、本統に吃驚したからな。』

老爺が質樸に答へたので、ます〱見たいの好奇心が募る。

妹もやうやく口を開いて、

『妾が貰はれて行くところは、伯父樣どんなところなの。』と兄と同じく又尋ねる。

『お前が貰はれて行くところは、青梅といふ町の在で、己らのやうな百姓だけれど、土藏が十個も十一もあつて、そこにはお父樣やお母樣がゐるから、よく言ふ事を聞かなければならぬよ。』

妹は何だか不思議さうに、

『お父樣もお母樣もゐやしないわ。お母樣は墓場へ行つちまつたし、お父樣も側にゐるんだつて、伯父樣も此間さう言つたぢやないか。』

『さうだ〱、お父樣もお母樣もさうだがな、あれは初めの父母でさ、今度は二度目のとゝかゝだよ。』

『それぢやあ別にまだあるの。』

『あるよ／＼。明日はお前を待つてるから、婆やと一緒に行くのだよ。』

妹はどんな母樣であらう、依然今までの母樣のやうなあんなに優しい母樣であらうか。依然あんな母樣なら、みいちやん／＼と頭を撫でゝ、一緒に寢てもおくれだらうし、談話も聞かせておくれだらう。あゝか斯うかと思ひ續けて、其夜は兄と抱き合つて寢た。兄は東京を思寢にして、どんな處かどんな家か、あゝか斯うかと胸に浮べて、其夜は共にすや／＼と眠つたが、夢に見えたは死むだ母で、どうぞ辛抱をしてくれよ、主人に出されて來てくれるな、必ずえらい人になれ、决して惡いものになるなと、我等の行末を誡しめたのである。

夜はあけた。兄は老爺につれられて行く、妹は老婆につれられて行く、二人は互に談笑して、かの川越の停車塲を指して。野には黄鳥も鳴いてゐる、雲雀も囀りかはしてゐる、けれども今日は名殘を惜むで、恰かも送るが如く聞える。

談叢

苦樂（下）

勝間禪夢

「されど、我は此の苦境より身の自由を恢復すべき望みの全く絶えたりといふにあらねば、少しは心も慰められ、日々十二時の勞働も耐らえて、今は唯だ身の代を儲けんとするより外に詮方なかりき、我は又た時折の閑暇に、莚席、旗籠など造て賣り試みしに、捌方善かりければ、少しは旨き物も喰うべられ、且つは便利のきく身と成りぬ、主人も我が働き振にや驚きけん、

頓に我を敬ひて奴隷待も廢め、賃銀さへ規則正しく與へたり、かくして苦しき内にも自らなる樂有るに慰められ、思はぬ月日を過ごしたるため、土地の言葉も覺え、風俗にも馴れ來りしかば、何時しか故國の事は忘れ勝になりぬ、さりとて全く忘れたるには有らで、風吹く朝につけ雨降る夜につけ、慢ろに昔戀しくなりまさり、故郷の花や如何月やいかにとはかなき事も思ひの種となりて、歸國せんことのみ願ひ居たりしに、間も無く思ひ掛なき事變こそ起りたれ、そを何ぞといふに或る夜、强盜の押入りて、事の形勢危く見えしを、我手强く刄向ひて曲物を倒し、終に主人の命を救ひし事なり、然れど此の爲めに我も重き手傷を負ければ、主人はいと懇ろにいたはりて命の親と敬ひ侍づき、殘る方なく治療に手をつくしたれば、傷も程無く癒えて心地さへ常に復しけり、されば主人の喜悅一方ならず、恩に報る標とて、我は自由を許されければ、其の嬉しさの已み方なく待ちに待ちたる歸鄕の念此時こそと燃え立ちて、古巣に急ぐ旅鳥、翼擴げし思ひして、程近き港より英國さして船出せり、

「軈て英國のダウンに到着したれど、物皆な昔に變る故郷の樣に、渡世の業さへ容易くは見當たらず、ほと〱難澁を極め、唯だ天命のまゝに身を任すより外なかりき、さるに其折我國は戰爭の餘燼尙ほ消えざりければ、昔取つたる擢の柄の腕に覺えのあるを幸ひ、海軍の水夫と成りて浪の上に働きぬ、程無く戰爭の治まりければ、賞與の金も數多獲て、其後はいと平かに恙なう暮居たりしが、泡沫のあへなく消ゆる世にしあれば、忽ち好ましからぬことの起りて、本意なく船の務を辭したり、さればそれより倫敦に赴き再び善き職もや有ると尋ね歩けり、

「我は倫敦人の惡巧におぞくも乘せられ、辛き目に逢ひたり、そを何ぞといふに、些少の資金を以て大なる

利益を儲け得る善き商業あれば、誰にても直ちに來れと、さも大業らしく書き立てたる廣告を誠と信じ、外觀かけ許の會社人を欺くとは知らで、其の言ふが儘に多くもあらぬ有金殘らず出だし、さて仕事はと問へば、申譯け程の物を見せ、後は野となれ山と成れにて谷底へ衝落すが如き處置、惡くやと思へど取回すべき手段無きに、詮方泣く／＼口惜しさ忍び、己が愚とはいひながら叉しても路頭に迷ひ出でぬ、

「あはれ我は、浪風荒き世に吹き流され、身を支ふるの金さへ無きに、ほと／＼困じ果て、途方に暮れ居たるが、世に鬼許は住まず偶には善きことも有れば、躰の健なるを資金とし今一稼ぎ爲よと、眞實籠めて勸むる人のありしに任せ、さる植木屋に奉公することゝはなりたり、されば我れも心嬉しく朝夕の泥いぢりも憂と思はず、いと健め／＼しく此の主人に使へたるに、程無く植木の業にも練れ來りければ、主人の覺えも次第に善く、手當も以前に増したるを眞實難有く思ひ、益々仕事に精を出しぬ、されば生活も豐かに成りて、少しづゝは貯蓄も出來ければ、此時初めて妻を迎へ、些やかなれども家も新に建てゝ、牝牛さへ購ふやう成りて、芽出度きことのみ打續きぬ、我が妻なる女は、自から學むるでは無けれど、心立さかしく能く我を助けて、つゝましく世帶を治めたれば、家の財も次第に殖え行きぬ、我れ一日の仕事を終へて家に歸り、疲れし肢躰を圍爐裏の傍に休むれば、妻は來りて我を慰め、二人の子供は膝に倚たれて喜悦顏、其の樂しさと嬉しさは世の憂きことも忘るゝ許にて、日々笑ましげにのみ暮して、三年の間は何の恙がも無かりき、

「さるに盈ちれば蝕くる世のならひ、主人の餘養なき賴みに否み得で、程遠き海邊にひき移り荒地を開墾することゝ成りてよりは、幸なき事にのみ逢ひて、土地の善からぬためにや、我先づ癘を病みて仕事もならず

打臥せば、續きて妻も熱病を煩ひ、終には子供にまで傳染して、不便や掌の玉をはかなくなしたり、かてゝ加へて夜盜に忍び入られ、家財悉く奪ひ去られ、嘆きに嘆きを重ね悲しさ遣る方なかりしが、夫婦共々病の癒えしを幸に、弱る心を振り起こし、再び仕事を始めたる程も有らせず、此度は洪水に家も畑も跡方なく流されたり、されど夫婦の躰に恙がの無かりしを、まだしもの幸福と諦め、夫婦かたみに慰められつ慰めつ、先の主人を頼りて旅立ちけり、

「旅立ちて間も無く、農夫の道連れを得たるに心強く力も付きて、何くれと浮世話語り合ふたる果て、我身の上のはかなきを話せば、此人中々の憐け知りにて、他事と思はで涙浮かばし、さる分限者の造園師に世話し參らせんといふを、こよ無き事と喜び只管に賴めば、心よく諾なひて、我を其が分限者の家に連れ行き、主人に紹介せ呉れたり、主人は委しく我が物語を聽き取りたる末、其の心にや叶ひけん、兎角の事さへ無くて直ちに園の管理を我に托し、尚ほその上に、家族棲まはす程の家まで與へられたれば此處に再び世帶を持つことゝなりけり、さるに依り、此の唯ならぬ恩に、報はんものと心掛け、ひねもす怠ることなく己が役目をいそしみぬ、されば次第に豐けく成りて、畑さへ借り得たれば、珍らしき花木の類も、數多く支立てゝ賣り出だし、することとなす事一として思ふがまゝに成らぬことなき嬉しさに、瘠せたる妻も太りて昔の花に返へり、衰へたる小兒も健やかに成りて、春の若芽の如く直ぐ〳〵延び行きぬ、

「次第に主人にも重く用ゐられて、遂に支配人とまで登り、見らるゝ如き、廣き畑を管理することゝ成りたれば、今は唯だ安樂に暮し居るなり、されど此れも皆な昔有りての今、何事も世は堪忍に若くは無し、苦しき思ひにも耐えたればこそ今の樂は有るなれ、

此の物語を聽きたる後は、氣短なりしゼオドールも浮世の容易ならぬを知りたれば、身の行も昔に變りて、癇癖などは起すこと無く、いと健めやかに働くやうなりしといふ、

猫の仇討

園部紫嬌

上之巻　烏猫の鳴ぬ日はあれど　甚六が恩は忘れず

昔々其昔伊賀の國平崎と云ふた土地に、吉世承知之助てふ武士があつた、此人の家臣に、烏勘左衛門惣領の甚六と云ふ、善玉悪玉の侍があつて、百性輩すら外道勘左、佛甚六と仇名した位だから、氷炭相容ず兩人は隨分呉越だつたが、主が主なら家臣とやら、勘左は犬を愛し甚六は三毛の牡を二なき物と撫つ擦りつ、三毛が咽喉を鳴せば、主も亦喜びころこんだ位だつた、そも此猫には由來因縁があるので、夫は如何かと云ふと、甚六或日少の所用あつて、村境の伯父を尋ねた歸路、或寺の前迄來ると、築地垣の長く連ける彼方から、一匹の猫が飛出し、甚六が前に怖氣もなく香箱を造り、畏つて云ふたには、（此時代の猫は器用なものさね人間と咄を仕ました）『私は京のほとり八瀨の里の瘦猫でムいますが、先頃蛙を喰まして腹を損い、圍爐裏の中へ灰糞を致したので、忽ち主家を追放となり、秋の猫毛が吹ば飛ぶ程の身代ながら、住み慣れし竈の下を振り棄て、何時叉主に近江路や、伊賀の國へ來つた者でムいますが何卒お慈悲にお扶けを、隨分養仕は氣を付ます、鼠も捕りましよ、爪はお障子お襖を、よけて磨ましよ願ひ升』、と憐氣に訴へ且つ歎いたので、甚六も不便に思ふて直ぐに抱き採り、家へ連て歸へりました。

偖て甚六は智慧もなく、毛色其儘三毛と命けて、片時も傍を離さず、三毛よ〳〵と可愛がつて居りますと、或日の事彼三毛が甚六の膝へ上り、申しましたには、『私は先頃申した通りに、八瀬の里を離れましてから、海山の苦勞心配を致しまして、彼山寺迄來りますと、例の通り和尙さんが、此私を紙袋へ押込で、ポンと蹴りやニヤンと泣く、其悲しさ、遂には八瀬へ殘しました女房共の事も忘れ、一層天水桶へなりと身を投て死なふかと、やう〳〵覺悟を極ますと、納所共が私を捕へて、おしやます鍋に仕てしまへと、すでに命もとら猫の、所を貴郞に扶けられ、斯樣安樂に暮すと云ふのも、何かの御緣でムいませう、翌日からは私が、萬事萬端働きまして、御不自由はさせますまい』と甚六が喜び顏を見て咽喉を鳴し、何處ともなく出掛て行きました。

スルト其日の逢魔時、屋根で一聲ニヤアーと鳴て、甚六が前へピョイと來た猫を見ると、ピシ〳〵跳てる鯉を一尾嚥えて居るので、『三毛手前は是を何處で捕て來た』『ニヤアン是は田甫の用水堀で』『好く捕れたの』『私には無理でムいますから、川獺に賴みまして』と云ふ具合で、是から每日〳〵、今日は雀、今日は鯔と持て來て呉れましたが、困つたのは蛇に蛙、蝶に蜻蛉、甚六も此奴は夏子の爲だらうと許して置くと、此所が畜生の淺猿で、或日主人と吳越の勘左衛門の家から、雞を一羽盜で參りました、



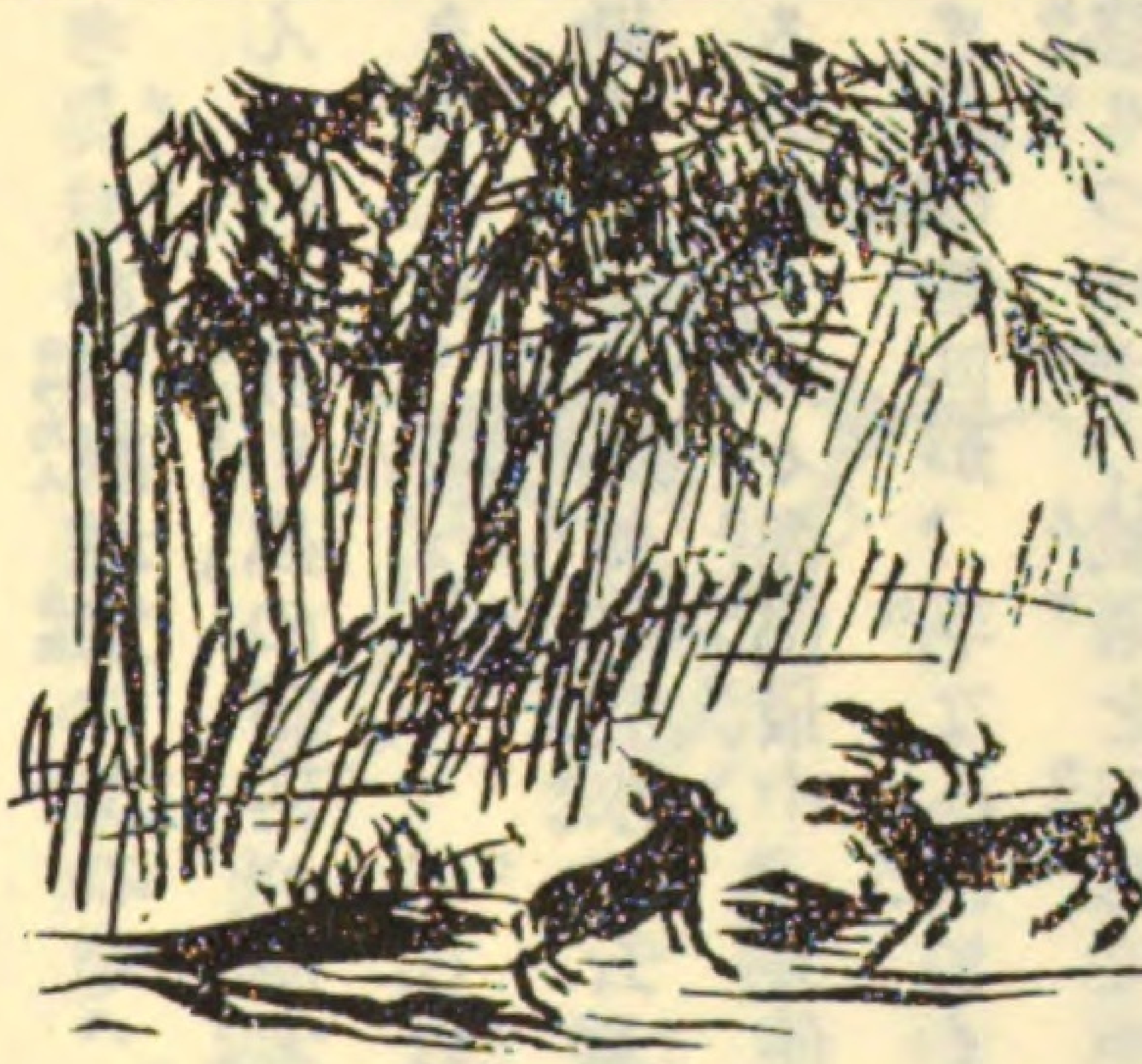
サア勘左の家では、猫だ犬だイヤ鼬鼠だと段々詮議の未、結局犬だと云ふ事になつて、村中の犬を殺してしまへと、勘左悉く怒たのを、例の愛犬が聞たので、早速此由犬仲間へ報せたから、酒屋の赤伊勢屋の斑、蓄

麥屋の黒に太郎左衛門の面かむり、角のめいた(牝犬)や無宿のはちわれ、其他あるとあらゆる犬輩、山寺の縁の下に寄り集い、相談數刻に渡つた末、酒屋の赤は尾を振つて『斯樣なつたら仕方がねい、勘左の邸へ荒込で仲間主人下女權助誰彼の容赦はねい嚙殺してしまふ分さ』太郎左衛門の面かむり、ワンと吠て一足進み『惡い〳〵其相談は好くねいぞ、酒屋の御用や子守と違ひ、左樣手輕く嚙もしめいし、第一左樣云ふ御自分樣が、按摩のめく市に尻尾を踏れて吠へ付た時、杖で頭を打れた時の手際ぢやァ、アァ上首尾たァいくめへぜ』『何の手前が知た事か、手前だつて伊勢屋の子僧に天水桶へ投込れて、おまけに竹の棒でかきまわされた癖に、己の所の隱居が扶けなけりやァ死だんぢやないか』『ワンだ生意氣な事を』『ワンだとゥ』『ワンがワンだ』と仲間喧嘩が始たんで、流石めいたは牝だけに仲裁を試みた、兎角する間に太郎左衛門のめんかむり尾を捲て、『喧嘩は私が惡かつたが、時に斯樣したら如何だらう』『其奴が好らう』『マァサ聞きなさい、一層勘左樣の家へ行て、決して私輩の仲間が盜だのはムいませんと、犬神でも誓て理合を咄したら好らうぢやァねいか』『成程ワンでも夫が好らう』ワンワン〳〵と相談が定つたので、デハ早いが好と、直樣めんかむり赤斑黒の四匹が使者となつて、勘左方へ出向きました。

勘左方では御使者到來と云ふので、何誰がおいでになるかと、夫々準備最中、お使者のお入イワン〳〵〳〵と前の四匹が、毛なみ正しく尻尾を振て、涎も垂さず眵もつけず、威儀を正してやつて來たから、『是は〳〵何誰樣かと存じましたら酒屋の赤殿伊勢屋の班殿其他御雨犬にはお揃でイザマッ彼へお通り下され』『然ば御免めんかむり』と一同座敷へズッと通り『使者の趣餘の儀にあらず、今度御當家にて雞一羽紛失せしより、

我々仲間の所業ならんとの御疑念掛り一同頭を斬らるべしとの事』なぞと猿芝居の馬を勸めて、少し芝居心のある赤犬が、口上スラリとやつて退ければ、太郎左衛門の面かむり嚙潰したる蚤を吐出し『今度の騷はワンデモハア、私等の知た事でねいテね、己ア入に聞た所では、甚六殿の所に飼れ么る三毛猫の仕事だアとよ』『ソウダ〳〵己も左樣聞て居るぞ、勘左さん是ア一ツ考え物だぜ』と是から四犬諸共勘左衛門は、密談二時餘り仕て、『デハ宜しいかの、必ず共に仕損ぜぬやう、身分は千里の藪かげより、心は直な竹槍にて』『狐ぢやアねいけれど』『虎の威を借る我々共』『首尾好くやつたら御褒美は』『鰯の頭、鯛の骨』と各々何か相談して、四犬は夕刻歸りました。

彼惣領の甚六は、斯る事があらふとは夢にも知ず、其日御前に出仕して、歸は每になく夜に入りて、千里ケ藪へ掛つた頃は早や夕月も山の端へ落ち、初更の鐘の眠氣に聞ゆる、唯さへ暗き細路を辿り〳〵急いで來ると、路側に寢て居た赤犬がワンと一聲嚙み付たので、シヤ何すると秡き討ちに一大刀浴せる脊後から、又一匹が飛付を、肩を越してヅデンドウ、起上るをば唯一打、ソレ嚙殺せと五六匹、



一度に掛るを面倒なと眞向梨割面かむり、或はちわれ班更紗、手當り次第に切り倒し、ホッと一息吐たる處を、外道勘左が藪かげより、竹槍操り出しアッと掛たる聲諸共、甚六は脇腹深く突通され、グッとも云はず其處へはたん。

暫くすると、藪かげからのそ〳〵出て來のは、甚六が愛猫三毛で、敢なき死骸を打守り、潸然と泣きて云ふ

やう、『事の起りは皆私よりにして、斯る淺猿き死を遂たまふ事、我なくばあるまじきに、許させたまへ甚六殿、妻戀ふ雉子猫夜の鶴、子を思はぬはなき物とか、鎌倉に在ます御母御前の聞きたまはゞ如何計り歎かせたまはん、然とて斯る災害に逢ひ玉ひし上からは詮方なし、我とても百日にして恩を忘ると云はるゝのみが能でもなし、イデ甚六殿に魂魄を移し、仇人勘左が命を取ん』と脊を高くし、眼を圓にして爪を張り、フゥーと一ッ鼻嵐を起して甚六が死骸の胸もとへ飛付かと見れば、三毛は何處へやら消え去りて、怪しや一旦絶息したる甚六が死骸、ムク〳〵と起上り『犬の噂も七十五四、暫く此身をせつない時のかみ方筋へ押隱し、時節を待て勘左奴を、左樣ちや〳〵』と行ふと爲る脊後から、流るゝ血汐赤犬が、ワンと飛起き組付くを、已れと又も切り伏て、何處ともなく立去りました。

偖てお咄が兩岐に別れて跡戻りを仕ますが、八瀨の里の權八婆と云ふ獨身者の家に居る三毛の牡猫は、自分の亭主痩猫が、主人の怒に觸て追出れた翌日から、何となく病付て、今では何か氣が狂つたらしく、鮑貝をお箸の先へ結ひ付て、毎日々々『猫ちや〳〵とおしやますが』と八瀨の里を踊り歩いては、唯『喏々』と泣き明し、鼻は激けど涙は露と鬢に宿りて、絞の浴衣の袖だに干場雪隱の、屋根から軒と日を暮し、秋魚も香を嗅ぐ計り、猫の目の變りやすきあした迄は、命も最早と思はれました。

スルト或日の黄昏時、權七婆の門口から、『權七お婆さんのお宅は此方ですか』と訪ふて入て來たのを見ると、年頃二十五六の柔和の男で、婆は絲車の手を止めて、『ハイ何方からお來になりました』と門口迄來て若者を見ると其儘走り寄り、『オウ〳〵若樣、好うお來になりました、サ、此方へ、穢い家でムいますが、ほんに婆と仕た事が未お洗足も上ませんで』と井戸端の方

へ參りますと、例の若者は甚六で、甚六には猫の魂魄が入つて居るので、所が此猫は例の三毛で、甚六の仇を討ちたい一心で身體を借りて居るのですから、成丈猫と悟れないやうに仕て居りましたが、前申した通り婆に以前飼れて居た時の女房は、今狂猫になつて居る三毛の牡ですから、夫婦數年振の再會で、餘りの嬉しさに、突然傍へ駈け寄て『ニヤゴ〳〵』と口早に別れてからの千枝十葉を咄したので、忽ち牡の狂氣も全快り、二匹其處等を駈け廻つて、喜びころこぶ最中、『ハイお洗足を持て參りましたモシ若樣』と婆が來て見ると、甚六は臺所の竈の上へ上り、三毛の牡は棚の上で、二匹顏を付合して、『ニヤア〳〵』『ニヤゴ〳〵』……婆は餘の事に驚き呆れ、思はず知ず薪木を採て、甚六を一ツぶち猫。

家政

壽命と食物

黒田生

健康なる身躰に健全なる精神宿るとは古諺なるが世人は往々攝生の道を誤りて腦髓を健全ならしめんとするものなり是れ孔子の木に緣りて魚を求むる如きものなり今やこの迷霧を破らされは臍を噬むの嘆あらん彼の時計は日々吾人に時を報して時計の時計たる責任を全ふす併し一定の時に卷かざるときは運動止む豈にこれのみならんや植物動物皆な然り最高等動物の位置にある吾人人類も亦然り攝生其の宜しきを得ざれば天壽を全ふする能はす故に先づ消化のことにつき一言し着々歩を進めんとす

吾人は食をとるときは固形物は口腔に於て門齒にてき

り犬齒にて裂き舌を運動えて臼齒に送り下顎の運動により之を磨碎す之の狀恰も石臼にて物を破碎する如し之を咀嚼と云ふ世の不攝生家は食物をとるに迅速を主とすと云ふこの弊害は咀嚼せずして嚥下するに至る謹まざるべからず又胃の强壯ならさる人はあまり飯に茶或は液汁をかけて食ふべからずこれ注意の第一なり

口腔にては化學的作用もあり即ち唾液腺とて耳下腺顎下腺舌下腺の三種あり皆口腔に離れるを以て細き管によりて之に通ぜり其下腺は耳朶の下にあり前は頬迄至る他の二腺と共に口底にありて何れも食物消化を助くるものなり口液の性質は混濁にして多少粘稠に縷を引く性あり通常「アルカリ」性の反應を呈す殊に飢餓の時には酸性なり耳下腺の出だすものは稀薄にして無色透明にして「アルカリ」性にして澱粉を糖化するものなり顎下腺唾は無色なるも多少白色を帶び縷を引き「アルカリ」性にして糖化作用著しく下腺唾液はその性狀明かならず

食は口腔にて食塊となし食道より胃に至る胃は平生空虚の時はその大彎を下にすれども食塊の入り來るや一轉して前に向ひ小彎後方に向ふこれ他方には抵抗甚しきも前腹壁の方には張り易きによりてなり又食塊は胃中を輪轉運動をなして消化せしむ胃中には胃液ありて蛋白質を「ペプトン」に變化せしむるものなり入により食物をとるも充分消化せずして再び口腔に歸り來ることあり恰も牛の反芻の如しこれは早く全治せざれば大害を來す故に注意して食物を節制し運動を適宜になし不消化物は必ず謹んで用ゆる勿れこれ注意の第二なり

次に一定時を經るに從ひ食塊は腸に至る腸に大小二つあり小腸を以て胃を承けそれより大腸に移るなり小腸に二大腺ありて之に注ぐ之を膵及び肝となすこれ等が消化を補助して小腸にて消化し得べきものに盡く消化され吸收されべきものは吸收されその殘りしものは大

腸に至りて肛門より出づ食後十八時後より廿四時間には食は糞便と化し去る併し盡くその作用をなすと云ふ能はず往々胃中に食の一部分は一週間も停滯することあり何れにしても世人或は身体を養ふ目的の事實を知りてその理を知らざるものあり故に吾人が食をするにその躰を養ふ所以を或問を設けて述んとす

第一（澱粉）曰く澱粉は膓液膵液なるものの爲めに「デキストリン」と葡萄糖とに化し葡萄糖は直に吸收せらる然らば「デキストリン」は如何と云ふ疑の起るならんとの「デキストリン」なるものは草食獸の血液中に存じ澱粉の葡萄糖に變化する中間產物なりとは確證あり又澱粉は胃中にては消化せず車前慈姑葛馬鈴薯甘薯小麥等は澱粉の大部を占む日常食とする米飯は百分中七十五乃至七十七分を含み大麥粉は四十六分小麥粉は五十五分なりとこの成績あれども適する能はざらん何となれば種類異なるあればなり又古今の米粉の重量はやゝ大差なければやゝこれも信ずべきものならん或人は曰く我國の玄米は元和元年に於ては千粒に五、六匁天明八年には四、七匁明治廿五年には六、三匁なりとそのたのはその計算せし人を知らざるも六、三匁とは農科大學の實驗によるものなり

第二（脂肪）脂肪は動植兩界に廣く播布する處の物質にして人生必要の營養品の一となす脂肪は膵液膓液及び膽汁によりて乳化し膽汁の吸收面を浸すにより始めて吸收せられ脂肪の一部は又膵液の爲に脂酸と「グリセリン」とに分解しその脂酸は膓中の「アルカリ」と化合して石鹼となし之によりて脂肪を溶解性にして吸收に便ならしむるなり故に脂肪は欠くべからず洋食の如きは盡く脂肪料理とも云ふべきか

第三（蛋白質）「ルードウヒ」氏の研究によれば蛋白質直接に膓より血管の小枝に移り行くこと明かなり抑も「ペプトオン」なるものは交流し易く濾過し易きか故

に吸收甚速なれども蛋白質の本種は吸收し難し併し蛋白質は吾人身躰にとりて極めて必要にて吾人躰質の多分を占む而して蛋白質にして吾人身躰に入り來るものは皆「ペプトオン」のみ然れば「ペプトオン」は吸收後何處にてか再び蛋白質に化し組織を構成するに與からざるべからず併しこのゝちは諸説紛々その眞を知らす暫く未明にをき後の識者を待つ何れにしても胃腸粘膜にて「ペプトオン」を蛋白質に化するの機能わらんと信す彼の雞卵の如きは炭素二百四水素三百廿二窒素五十二酸素六十六硫黄二即ち$C_{204}H_{322}N_{52}O_{66}S_{2}$よりなるものなりとかく複雜するものなり故に研究に困難なり蛋白質は身躰の活力本源及び組織成分となるものなり

第四（含水炭素）含水炭素中にて擧ぐべきは葡萄糖のみなり何となれば乳糖も蔗糖も吸收に先ちて葡萄糖に變躰すればなり含水炭素は窒素なし此ものは食物中必要欠ぐべからず醫學博士某は脚氣病の原因に炭素多ぐして窒素の量少きによると是れ蛋白質少く含水炭素多きなりと醫學博士某の實驗によれば麥飯は米飯よりこれに適するものなりと云ふ併し消化の點より云へば米飯よしとす麥飯の脚氣によきは便通宜しきの原因ならんか何れにしても含水炭素は身躰中に燃燒して活力を起すものなり

第五（アルカリ）鹽類「アルカリ」鹽類中「カルチユム」「マグネシユム」は緊要なる身躰成分にして多くは燐酸と抱合せり血液には「カルチユム」多く筋肉には「マグネシユム」多く骨中には石灰最も多しとし石灰不足なるときは骨の發生に障害を起し不具となるものあり「セムシ」はその一例なり母乳中には石灰ありて乳兒に石灰を與へるなり彼の食鹽は鹽素と「ナトリウム」よりなるもの故常に用ゆるを可とす「アルカリ」とは「ナトリウム」「カリウム」を重なるものとす「アルカリ」土類には「カルチユム」「バリウム」は主もなるものなり

第六（酒精）「アルコホル」は躰内にて酸化し炭酸と水とになり發温の本源ともなる併し之を飲むときは二度より零度以下五度と躰温減じ蛋白質を凝固せしむ併し攝取すれば神經血管を興奮して血液循環を早くして人をして能く勞役に堪へしむ余の學友に少量を傾けて記憶力を增進せしむるものあり併し古諺の酒は量なし亂に及ぶと果してこの言の如し故に修業中には用ひざるをよしとす下流社會の婦人は往々泥醉するものありその弊は果して如何ぞやもし過量に用ゆるときは神經血管の麻痺を招き大害を釀すは人口に膾炙するところなり人或は云はん然らば珈琲茶は如何此の二物とても興奮する性あり故に大害ならんと余は曰くなるほど珈琲茶の中にも「アルカロイド」の「カァフイン」「テイン」等の興奮する作用あれどもこのものは「アルコホル」の如く蛋白質に作用するものにあらず又酒は思わず多量に過ぐるなれども茶珈琲は如此憂なからん

第七（動物性植物性食品何れが可なるや）この問に一概に答ふる能はず何となれば動物性食品は肉乳卵なり肉中吾人に必要なるは魚肉なり何となれば魚肉は蛋白質多きを以てなり乳は小兒の唯一食物として之を養育するの効あり彼の「コンデンスミルク」なるものは蔗糖を加へたるものにして乾酪は乳に胃液醱酵素を加へて乾酪素を沈め之を集め鹽したるものなり「バタ」は乳球を集め攪打して作れるなり卵は三十七六分の卵黄と六十二、四分の卵白ありて卵殼中にありこれより小鶏の發生するを見るも完全なる食品と云ふべし

植物性食品は蛋白質脂肪灰分よりなる凡て植物質は消化し難きと云ふもこの物の消化し難きにあらずして不消化なる木纖維素被の之を包む故なり植物質は一般に水分頗る多量なる故充分營養を與ふるには多く食はざるべからず

食素の分量の最好きは含窒素性のものも無窒素性のも

のと一と三、五乃至四、五の比例をなすにありと云ふ
或人の分拆上より云へば肉の如きものを用ゆるときは窒素をとるを得米の如きをとれば炭素をとる故に肉のみを以て食とせは炭素足らず故に野菜を以てす米のみにては窒素足らず故に肉類を以て補ふべし

白　粉　　同

世の婦人が幼少の時より多量に用ふるものあり老後に至り鉛毒症を憂ひ爲に四肢麻痺して遂に天壽を全ふする能はざるものあり生大に之を憂ふ故に玆に一言せんとす

この白粉なるものは鹽基性炭酸鉛にして炭酸鉛と水化鉛とよりなるものなりこの製法は多くは英國の製法によるものなりその法は鉛板を螺旋狀に巻き醋をもりたる一のかめの中に入れその上を鉛板にて被ひ之を馬糞中に並べ大凡そ百日間も經過すれば醋酸の蒸氣と大氣中の酸素とに由りて鉛を溶解し馬糞腐敗の時に發生する處の二酸化炭素と化合してその中に鹽基性炭酸鉛を得これ即ち白粉なり何れにしても世の中にある白粉の多くは鉛の化合物なり衛生上無益有害なるものなり

又白粉は硫化物の爲めには黒色に變ずるものなり何となればこの炭酸鉛は硫化水素の爲めに硫化され硫化鉛となりこのものは黒色を呈する物なり貴婦人は必ず經驗せられしならんが未だこの經驗なきものもなきにしもあらずと信じ老婆心ながら一言の注意を述べん

昨年生學友二名と避暑の爲め函嶺地方に旅行しその途上宮の下奈良屋に一泊す生等の隣室に令嬢然たる妙齢の婦人は家扶然たる從者を伴ひありけり彼等は蘆の湯にゆかんとして例の白粉を以て裝飾を始む時に生等曰く蘆の湯は知らるゝ如く硫化物即ち硫黄を含む故に白粉を塗り至るときは玉顔忽ち變じて印度人の如く黒色

となるべしと注意せる生等の言を彼の輩は信ぜざりしか又信ずるともかゝる異變するとは思はざりしかそのまゝにて蘆の湯に至りたり生等は底倉堂ヶ島を巡り雨中撮影しつゝ五日目にして蘆の湯に至り紀伊國屋に投宿す不思議にもさきの令嬢は同じくこの浴舍にありき顏は恰も黒羅紗然として欝々たる如し孃曰くさきの折角の注意を用ひざるが爲め今この有樣と他は一言なしこの例は生等の實驗談なれど世の婦人諸君は猥りに多量の白粉を用ゆるは必ず拳々服膺せられよもし之を輕々視するものあらばこの孃の二の舞をなすならんこの例は白粉を用ひて硫化水素の害を受けしものなれども猥りに用ゆる時は白粉自身が皮膚に作用して鉛毒症を起すことは博士大醫の證するところなり下流社界を見るに僅に七八歳より化粧をなし白粉を塗る如何なる痴呆者なるか臆測する能はずこれを眞に自ら自己の生命を短縮せしむるのみと云ふべし世の婦人は己れ白粉を以て己れの容貌を美なりと信ぜるか試みに彼の俳優を見よ彼等は白粉の爲め父母より得たる良質は變じて蒼々然として天然の容色更になしこれを眞に彼の諺の累々然として喪家の狗の如しと云はんか

自家療治八件

第一（創傷）總て創傷は清水にて洗ひ創口の汚物を洗ひ去り冷水の力にて出血を止めよなるべくは石炭酸を以て之に換へなば大に利あり尤も身躰内部の創傷例へば眼鼻口なれば硼酸水を可とす創傷大にして出血止まざれば救急策を行はずして醫師の診察を乞ふべし

第二（すりむき）靴ずれ等にてすりむきを生じたるときは冷水或は燒酎にてその局處を洗ひ冷水にてひやし次に白粉饂飩粉若くは葛粉をすりこむべし

第三（咬傷）「まむし」その他毒虫例へば蜂百足虫等にさ

ゝれしときは先ず「ハンカチーフ」の如きものにて創處の上部を堅く縛りて毒の瀰蔓を防ぎ且つ創處の出血を促がし更に創口をかみ充分に毒血を吸出し石炭酸水を綿に浸し貼すべし

第四（火傷）皮膚赤色となり痛みを覺ふれども未だ水泡を生ずるに至らざれば冷水を注ぎ饂飩粉又は白粉をふりかけて石炭酸水若くは「ザルチル」酸軟膏を以て外氣に觸れしめざれ水泡を生じ皮膚剝脫したるときは注意して冷水につけて石炭酸水を綿に浸して被ひ數回新くすべし又熱湯の爲めに口中火傷を來たしたるときは硼酸水の稀薄せるものを用ゆべし

第五（凍瘡）「しもやけ」はその初發のものなれば患部及びその近傍を雪塊を以て自然と温氣を發するを良とす次に冷水を布に浸し患部を被ふべし之に反し已に久しきに渡るときは沃度丁幾或は樟腦精を布に浸して被ふべし

第六（傳染病）「チフス」の前兆は夜間安眠するを得ず四肢倦怠頭重く眩暈身躰安からざる等にして發熱躰温大に上昇し脉搏その數を增し舌唇乾燥し下痢をなすときは前額を冷却し少量の氷塊を飲ましめ醫師の診察を乞ひ消毒法を行ふべし

「コレラ」の兆は下痢非常にしてその量も亦多し且つ稀にして殆ど臭氣なし顏色憔悴眼球陷沒す顏色汚青色となり脉搏沈み皮膚の一部をつまみ之をはなすも皺は依然と存す食物を吐瀉す上肢に劇しき痙攣を生ず醫師に診察を乞ふべし

その近隣に「コレラ」患者あれば不消化は勿論未熟の果實を食ふべからず毛織物にて腹卷をなし冷へざる樣注意すべし

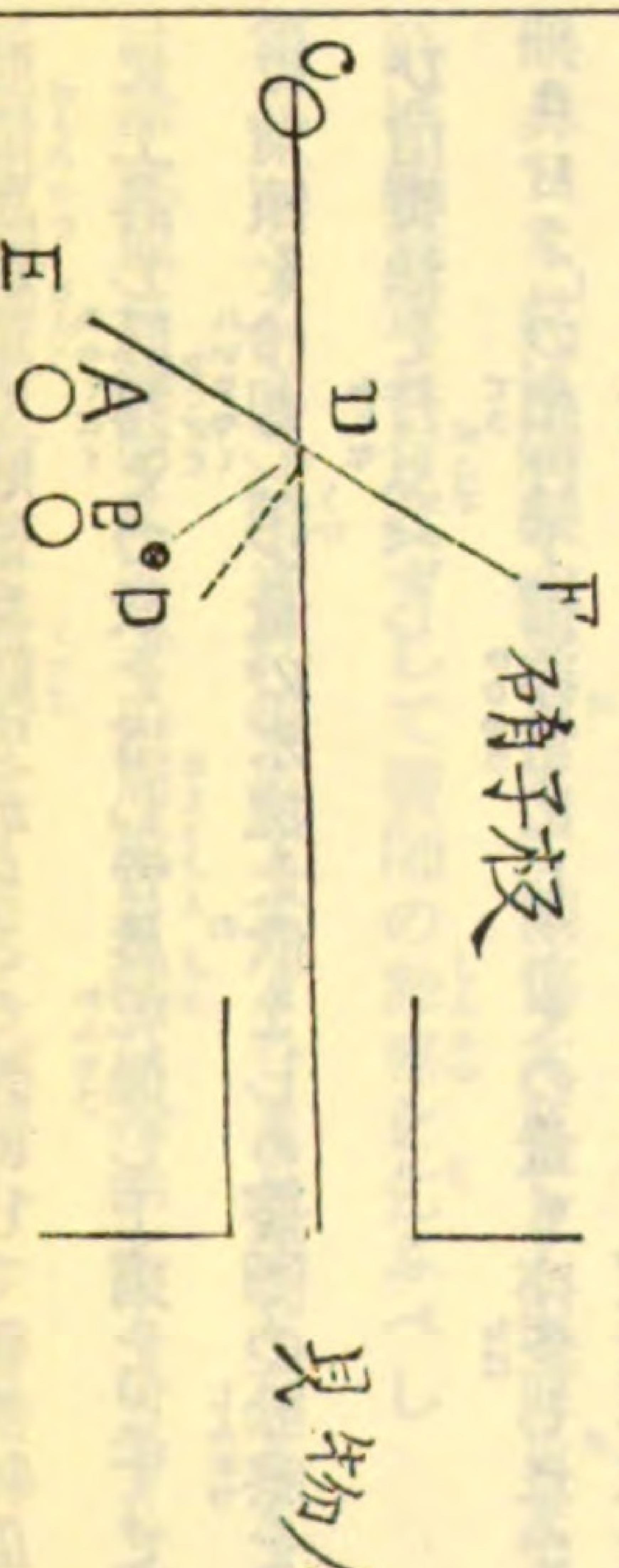
「ヂフテリア」は「アゴ」の下に瘰癧を生ず又その始めは咽喉及びその兩側にある扁桃腺緊張して疼痛を起し大熱を發すこの病は危險なれば醫師の診察を乞ふべし

第七(齒痛)齒痛の原因は多くは口中の不潔による故に之を豫防するには食後よく食渣を洗去し勉めて熱物冷物を交互に用ひざれ、もし齒痛を發するときは微温湯にて數々含嗽し齒に孔あれば「エーテル」を綿に浸し齒間に咬みしめよ

第八(感冒)風は百病の基とて感冒を等閑になせば氣管枝炎肺炎に罹るは往々見る處あり葛湯を服し褥に入りて充分發汗せしむべし

石像の發音

これは先年某處に於て實驗したるものにて舞臺に一の石像あり忽ち一婦人と化し言語をなす又もとの石像となり千變萬化の奇觀をなすこれは光線の反射の應用なり之を戲になさんとせば幻燈に用ふる如き洋燈二個と硝子板一枚に黒き布あれば試むるを得べし假に次の如き裝置をなしCの處に帽子をおき何れの者にても人の望む物品を借りてDの處におき次の方法をなせば帽子は忽ち他物と變ぜんと茲に一の室ありとす一面即ち硝子板を裝置する後方には黒布をはりEFの方向に即ち後方の黒布に角度をなす樣に硝子を立てAとBの處には幻燈用の洋燈を裝置せよ何故に幻燈用のを用ふるかと云ふに光を徐々に暗くし又明くなさねばならぬ故なり斯くして裝置終る見物人に向ひ曰くこのところに一の帽子がありますこの帽子は諸君の望み通りに變ずるものでありますと云ふて聽衆よりステッキなり何なり受取りてDのところに置くべし尤も最初は兩燈を閉ち暗

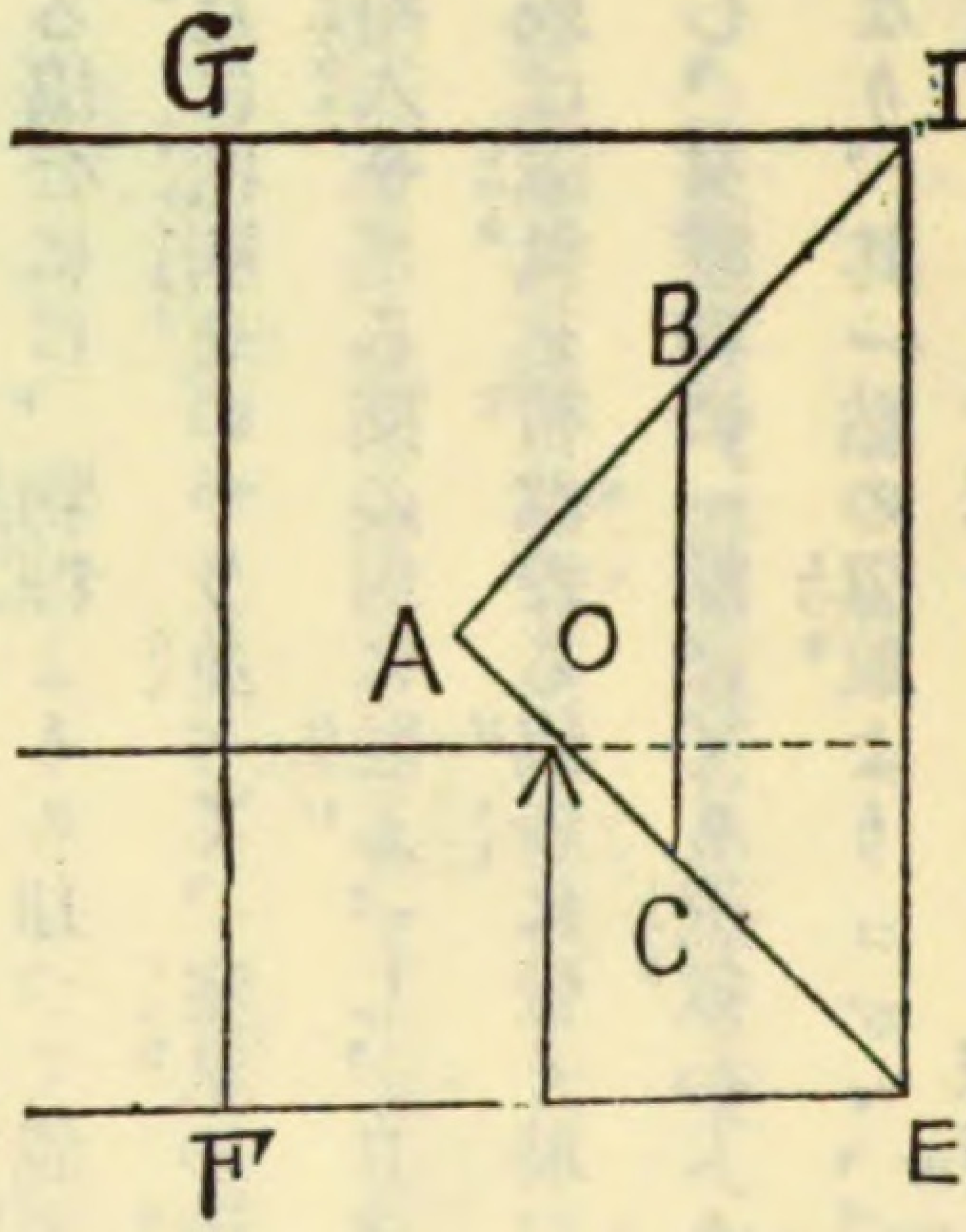


くなしおき先づAなる燈を明くなすときは見物人は硝

子板を通してこそ見るなれ次に漸々Aを暗くしてBのみにてDを照す樣になせば見物人は恰もDはDにあるが如く思ふなり

斬首術（理學的手品）

このことは陳腐にして三尺の童も知るならんと思へどもある尋常中學上級生にこの問を起せしに更に答へ得ざりし故に未知の人もあらんかと信じ説明せんとす



先づDEF GDEは壁にして何れも三壁とも同色となしABCを机とすその位置は上の圖の如くなしBACなる角は直角即ち九十度となしABACを鏡とす然るときは見物人の目に入る所の光線はEFとGDとより來るものにしてその光線はDEと同一の色合なるを以てACBなる机の下部にはなにもなき如く見え只首のみが机の上にある樣に見えるものとす別に六ケ敷ことにあらず

夏の鷄卵

鷄卵の善惡鑑定につきては先號に詳しく記したるが目下夏期中の鷄卵は頗る腐敗し易く今まで確なりとランプ又は日光に透して鑑定したるものが僅か一夜の内に黄質の崩れること珍らしからず、尤も鷄卵は他の獸肉、魚肉等と違ひ産出より三十日間は暑中と雖も腐敗の憂なけれども、商店にあるものは諸地方よりの寄集に係るものなれば新舊混同して産出以來の經過を識別し難し、されば眞に養生を尙ぶ人は少許は割合高くとも個人養雞家に就きて日々產出したるものを求むるか、又は成るべく繁昌する玉子屋に買ひ取らば永く店に列べ

置きたる雞卵の來ること稀ならん、一度に多くの雞卵を買ひ置く場合、若しくば他より到來して貯藏を要する場合には、籾糠よりも却つて蕎麥殼の中に、雞卵相互に抵觸せぬやう並べて、空氣の流通よくして日光の射入せざる棚の內に貯ふべし、日光を受けしむるか、或は濕氣を帶びたる場所に置く時は腐敗を速にすべし、又雞卵に一點にても濕氣かゝらば則ち腐敗の基となり、其一點の濕氣よりコンマ、バチラスが殼內に浸入し全部の腐敗を招くこと、肺毒の猖獗抑制すべからざるに比すべし、雨などにかゝりたる雞卵を點撿せば、其濕ひたる殼の方面に黃質吸着せられ、殼を割れば白質のみ流出するを見ん、而して又黃質白質共に腐敗しあるを見るべし、

「モートエキストラクト」

夏日は格別飮食物に注意するの必要あり、故に消化よく、滋養あるものを擇みて、飮食すると肝要なり、この「モートエキストラクト」は米國にて健胃の効ありとて、世人の稱揚を受けし物なるが、其原質も製法も水飴と異ならず（甘藷にて水飴を造る法は庖廚雜俎第四(12)に掲載せり參照せよ）其法は先づ糯米一升を洗ひて一夜水に浸し置き、翌日に及びて、蒸籠にて熟したる後再び冷却し、次に蘗芽粉二合と水とを適宜に加へよく攪拌し、其溶解せるを度とし（夏日は十時間位置けば溶けるなり）布袋に入れて濾過し、其汁を釜に入れて烹るなり、さすれば水飴となる、米國などにては、夏日麭麥に此水飴を塗り「パタ」の代用として食するもの婦人連に多く之を見る、水飴は消化を助け、且滋養あるものなり、夏日の小供の間食物などには適當ならん、

胡麻の皮

煎り立ての胡麻を、茶の煮ばなの熱湯中へ投入する時は忽、皮は自然にはぜて脱する事妙なり、一躰に黒胡麻の皮を脱して用ふれば、風味白胡麻に優るものなり、實驗して、珍客を驚かすも妙なり、

寄書百珍

家庭的避暑法

下野　子日の松

「人皆苦炎熱、吾愛夏日長、」などゝ肱を曲げて午睡する者多くあれど目寤めて後何となく心地の悪しき點より見れば午睡は決して善良なる家庭的避暑法とは云ひ難しされば他によき工夫はと問けば予は左の如くにせよと答へん

（一）庭内の狹きものは詮方なけれど成るべく樹木類を植え日覆となる様にする事

（二）衣服を洗濯する事は勿論坐敷庭前など隈なく掃除し時々水など灑ぐ事

（三）家業を規則だてゝ行ひ怠るとなかれさすれば心身自らひきしまりて暑熱にも堪ゆべし

（四）心を時々新奇なる事に轉輾して始終快活ならしめ欠伸などのいでざる様すべし例へば仕事に倦めば讀書などし讀書に厭けば談話などする事

先此の四つを以て最良なる家庭的避暑法なりと予は思ふになん

北海道美唄　丘山生

家庭的避暑法とは他なし一家健全にして和氣藹々の中に暑を送るにあり曰く毎日早暁寢を離れ室内室外隈なく奇麗に掃除をなし終日各自の職業に勉勵し薄暮一家團欒として手釣の新鮮なる川魚と手植の蔬菜に口腹を充たし以て天上の明月を賞し庭前の花卉を讃し不知不

識の中に華胥の夢を結ぶにあり

大阪　稲葉瀧之助

朝は五時に起き冷水浴を行ひ其日の務は遲くも午後三時迄に畢り室内の掃除は妻に任し己は庭園を清楚にし充分水を撒き掃除終りて入浴し浴衣に着換へ妻の手料理にて一家團欒夕飯を食し後風通りのよき坐敷にて子供を相手に倶に相戯れ互に面白き話の交換をなし所謂「樂は夕顔棚の下涼み」に家庭の樂はあり敢て避暑旅行を羨まず

三重　世古英太郎

拜啓余が住所寒村格別好避暑法も無御座候得共吾儕農生が年々炎苦を慰し自ら足れりと致居候摸樣を左に申上候

第一室内を掃除可致候別段かざりは致兼候庭樹綠陰の下清風の吹き來るに打ちよりて暑も忘れ父母妹弟と家庭の談しに耽ることもあり又小窓を開きて日頃望みの愛書をよみ知らず〳〵佳興に入申候倘机上一輪の挿花を置くなど和樂之中いとゞ清閑を心掛け居候

第二園庭を掃除可致候楓松杉の繁れるに落葉を拾ひ青ゝと苔の中に古くさみ付きたる石などあるに折ゝ水たぶ〳〵と注ぎなど致候又手植の菊も二ッ三ッ鉢臺にありかくあちこちと自ら意を用ひ置き眺むるを此上なき清涼と樂み居り候

先右迄に御座候早々不備

東都小石川　十六人投

朝夙く起て些ゝやかなる庭を清め、笹の葉末に結ぶ露の玉に眼を快ふし、咲ける牽牛花の花を眺めて、翌朝は是よ彼よと蓄の數に幼き者の餘念なき嘻笑に誘はれ。さて一日の職務に家を出で、日影傳通院の森を横に照らす頃、家に歸り、シャツ一枚に跣足となりて庭に水

を撒き、四ッ五ッ、盆栽に霧を遣り、錦魚入れ置く硝子球の水を換へ、行水をすまして、椽側に敷く花莚へ身躰を氣儘になし、一日の疲れを夕の涼き風に休め、縁日に購めし色硝子の風鈴の音、庭に繼く叢の「キリギリス」が鳴くに和するを、天來の音樂と聞き幼童和手に罪なき話して笑ふ一家團欒の樂み。日曜の公休には幼昔より先になり、竹造りの「水出し」と云ふ唯一の噴水器に水を絶さず、奇しき形の燒物より吐く水を錦魚入れし盥に受けて瀧を聞く思ひをなし乍ら、横になりて讀む新聞、雜誌いつか顔を掩ふて夢の中に鑠金の日中を過です。是ぞ母弟三人暮しの十六人が五年以來の避暑法とす。

齋藤正次

人各ゝ居住するの地位によりて避暑法復異ならざるを得ず故に余は家庭的避暑法を人造天造の二種に分たんと欲す

家庭的人造避暑法は第一に樹木第二に家屋の開通第三に庭中の廣き處となす此の三種にして完備せんか日光遂に其志を得ず家庭的天造避暑法は第一に庭外四顧廣き處第二に住地の高き處第三に河流の在る處此三種にして偶備せんか吾人春秋冬あるを知て遂に夏あるを知らじ

備後 喜樂坊

家庭的避暑法の最上手段は家庭の和樂に若くはなし一家常に風波なく愉快に共樂に和氣靄然たらば熬々たる苦熱もなんのその凉凉の清風は一家に滿つる可し何ぞ他の手段を講ずるを要せんや之れ予の保證する所なり

三重縣 きゝやう生

避暑の最大秘訣は暑さを忘るゝにあり尤も平民的に行はれやすきは左の如けん

一、愉快に事業を勉勵すると
二、親族朋友との信書の往復
三、親族朋友を訪問快談すると
四、庭園の植木に手を入るゝと

五、家族間の親睦家屋の清潔は言ふ迄も無きとなり

西京　稻華生

家庭的避暑法は心理的避暑法にあり親愛和樂は第一にして第二第三もこれに同じ相愛の夫妻其平素の事業をしばらく打ち捨て氣兼なく氣苦勞なく自由の中に新聞雜誌及雜書を亂讀し共に讀み互に讀み讀聞かすなど最可なり時に良人は妻君に代り心太を料理し西瓜を切り浴後櫓に出で丶共に食ふ亦樂ならずや要するに平素の業務を變じ親愛和樂自由の裡に生活するとなり稻華生家は田舍にあり愛する妻と共に出で丶は田畝の間に逍遙し入ては以上の法を行ふ未だ湯治海水浴云々の避暑法を思はざるなり然れども主動者は良人の考一にあり良人たるもの宜しく愛する半身の爲めに以上の法を講ず可しそれ煙草盆其れ茶とあでの御指圖は御免あれ

引續き次號の寄書百珍問題は左の如し

『家庭的避暑法』

如何なる家庭如何なる人にても年々家庭的避暑の最良手段あるべし

曰く湯治曰く海水浴曰く舟遊曰く旅行曰く山遊曰く何々曰く何々所謂家庭外の避暑法は多く且つ世に紹介せられたり

吾社此問題を揭ぐる目的は如何にして容易に安樂に愉快に家庭内の避暑法を行ふかにあり要は家庭的避暑法の最上手段を揭ぐるにあれば一行にもて十行にても可及的簡潔なる寄書こそ望ましけれ多種及多數を羅列して愛讀諸君の一燦に供せん

社交一斑

流行の團扇

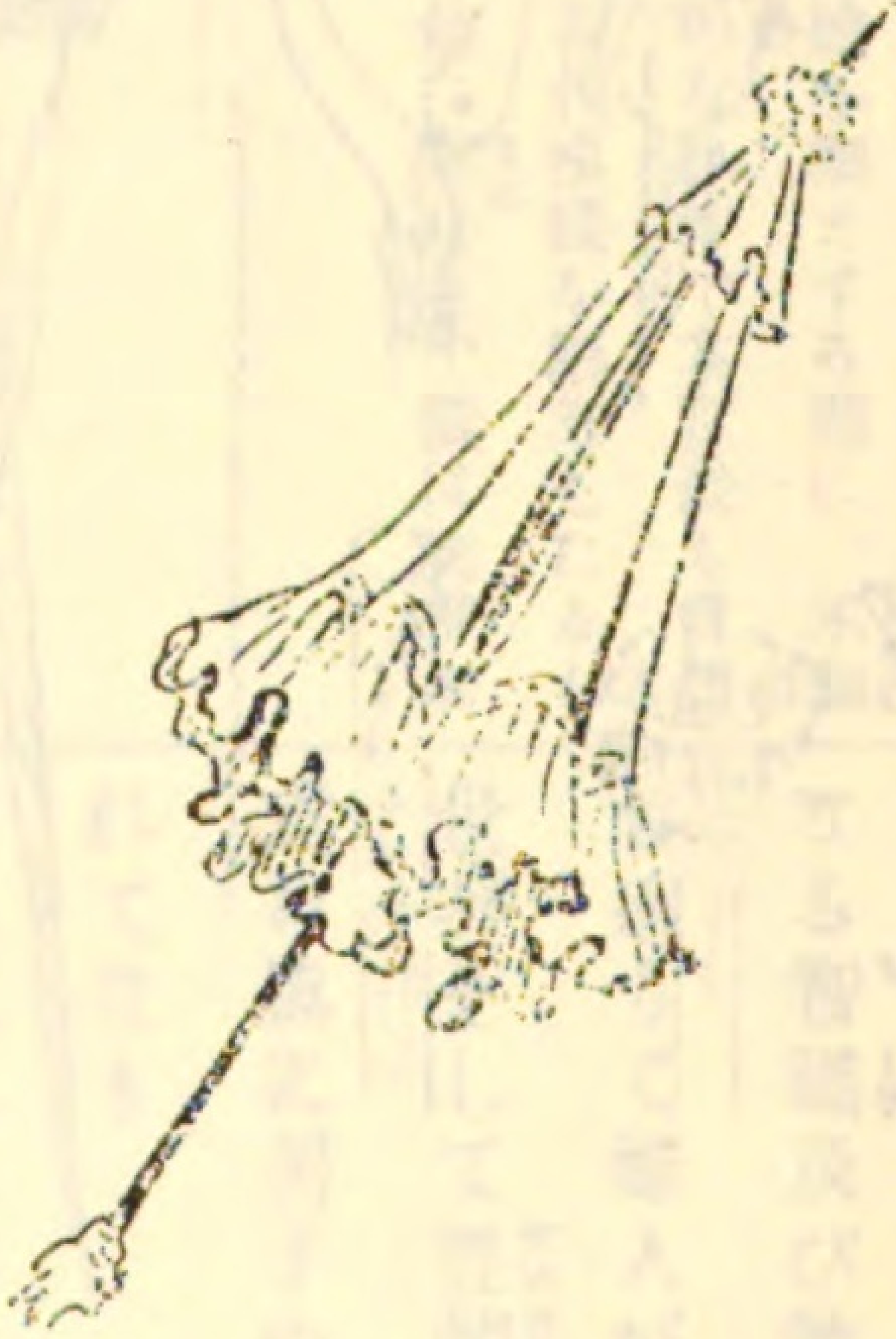
流行子

本年流行の團扇は例年よりも遙かに高尚優美に傾きたり、形は毎年相變らず卵子形と棗形の二種なれど、卵子形の方盛に流行す、紙地の摸樣は千態萬狀、一々記し難けれど、先づ花鳥畵第一位を占め、次に人物畵、歷史畵又之に亞ぐ、京團扇の極上、絹地に高尚なる香繪をなしたるもの、

上等社會に使用され、又外國人にも近來非常に珍重されて商館の注文も多き狀態なり、其外に岐阜の鵜飼團扇(一名塗團扇)、和歌山の葵團扇も日下夥だしき流行にて、殊に葵團扇は、其の柄の輕妙なるが故最も賞美され、五色揃つて三十五錢(一本七錢)位なるを葵團扇の上等とす、此頃新たに流行し出したる物に、田沼の水團扇といふものあり、その製造は稍々岐阜の水團扇に似たれど、紙地(雁皮)の色合、純白透明、恰も蟬の羽の如くにして、且つ摸樣も珍らしく價も頗る廉くて、下等三錢より上等十五錢位に止れば、頗る經濟向の團扇といふべし、此は日本橋區柳原川岸二號地田沼商店新案の販賣品なり。

岐阜提灯

今年は此の提灯の摸樣去年より一層淡泊清雅に成れり、されば墨繪の山水畫、花鳥畫等需要者最も多き形勢なり、二重張は前年に比し賣口甚だ悪く、之に代りて流行するは極上一重張の杉柾口輪、菊の盛上げ等にて、價二圓内外なるもの第一等の勢力を占む、次には別製にて、塗口輪に二重の金物を打たるもの、價四十錢以上一圓内外なるが一般に使用す、絹總には赤、水淺黄、紫白染分、紅白染分等最流行、又朱塗の口輪も近來頗に流行し來りて、黑七分に對する朱三分の割合とは成れり、本來岐阜提灯の特色は、構造の輕妙なると風采の雅致なるとに在れば、之を捕端につるして眺むる時は、光風霽月草露蟲吟、凉味自ら其の内に籠つて淸爽言ふ方なからん、左れば本邦人の愛翫は勿論、外國人も非常に之を賞美するに至り、恰も本年英女皇六十年祭の折とて、同國より五十萬張の注文を受けし程なりといふ、それが爲め地物非常に拂底となりて、殆ど二割半の騰貴を來たせり、且つ又地方の仕込み愈々烈しくして品物愈少なく成りたれば、舊曆盆前に至らば、尙ほ一層の高直を示すことなるべし、府下にて著名なる賣捌店は銀座の神谷と青物町の相摸屋なり。

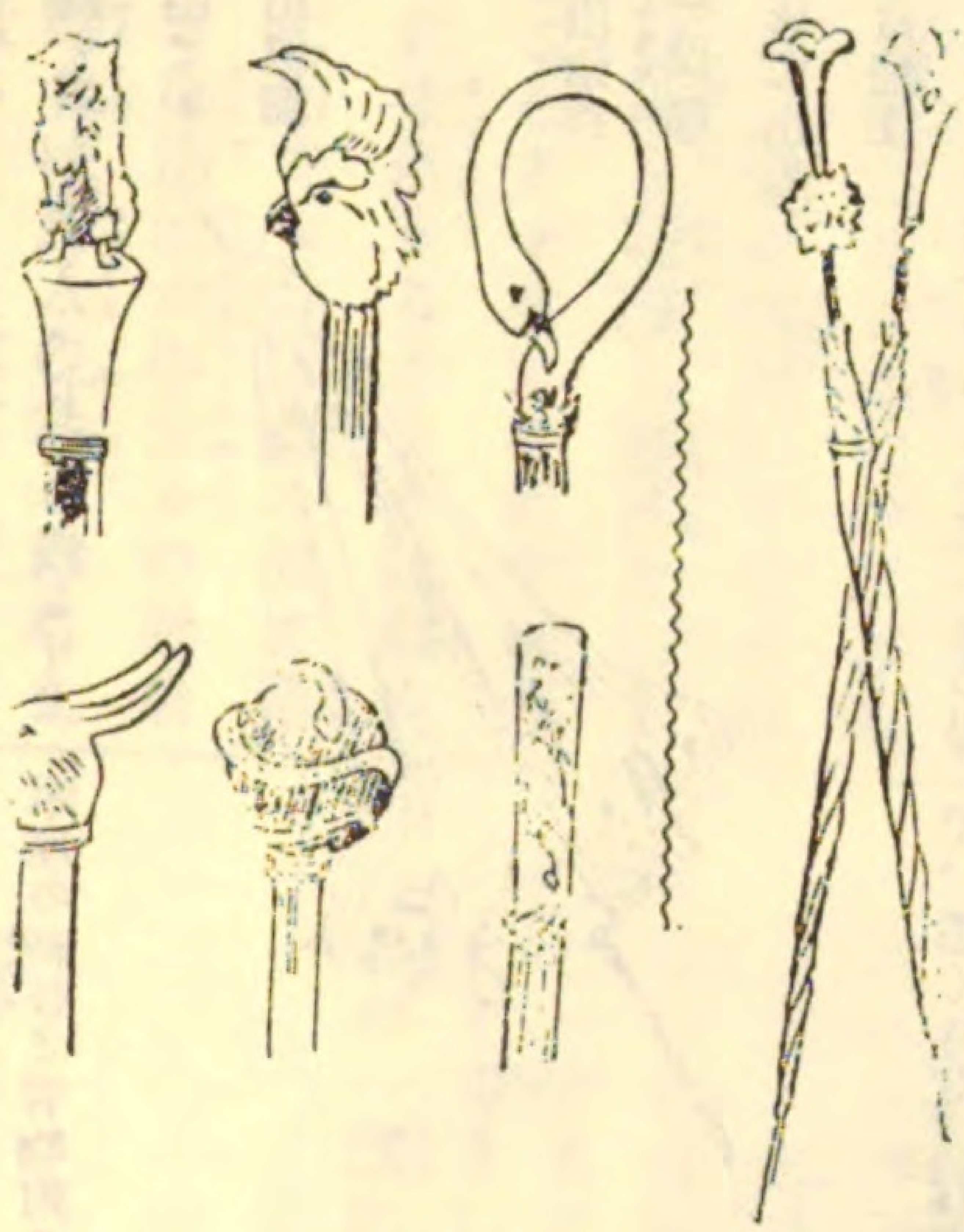


懷中時計

近來時計の需要頓に增加したるの原因を視るに、一は我國一般の社會が時の觀念を知り來りたると共に時計の必要を覺ゆるやう成りたると、一は奢侈の嗜欲一般に增進したるの、二つに因るべけれど、流行の狀態實に驚く可き程にて上等中等はいふまでも無く、下等社會の車夫車力、漁夫船頭、人足土方に至るまで、悉く時計流行の涙を浴びぬは無く、今迄白銅側に滿足したるものも銀側を撰み、銀側を愛翫したるものも金側を望む如き形勢と成りたり、されば先づ上流社會の流行より記載せんに、貴顯といはるゝ類の人は、純金時計の二十形か又は二十一形にて、米國製無地側のものを極上として愛用す、中には無地側の上に蛟龍、麒麟、鳳凰の如き美術彫刻を施したるもありて、金色爛然四邊に輝き、何う見ても五百圓より千圓に登る

品なり、次に紳士社會に專ら持囃さるゝは、同じく米國製にて側に模樣あるもの、形は二十一か二十二なり(價四百圓以下百二三十圓)、又た夫人とか令閨とかいふ類の婦人は多く十三四形の小造なるを好む、之に對する金鎖には、純金と白金と交ぜ合せたるも善く、又白金のみにて作りたるも流行すれど、普通使用さるゝは、金着にして形には種々斬新なるものを見受く(價十圓より三十圓)。

銀時計　は中等社會即ち中通りの官吏、實着なる旦那株等の使用に供する實益品なれば、流行の勢力も數量に於ては確に金時計の上なり、目下は兩蓋が最上の流行にて形は可成小なるを好むの傾向なり(價　極上五十圓　下等十五圓以上)、其他一般に珍重さるゝは白銅側の價七八圓位なるものにして下等社會の人にても尚ほこれを携帶するに至れり、目下の形勢を視るに、金側、銀側を通じて、大概米國製のもの賞翫さる、其故如何となれば米國の製造は綿密丁寧にして、種々新奇なる模樣を側或は文字板に施し、其の外觀殊に艷麗なると、器械の精巧にして堅牢なるとの長所、遙かに瑞西製を凌駕すればなり。



指環と眼鏡

目今指環の流行品に種々樣々にあれど、夏向流行の大略を言へば、先づダイヤモンドを首とすれば、普通の社會には用ゐ得べきにあらず、一般行はるゝはサフアヤ、眞珠等の類にて、現今流行の最たり、臺は純金か又は白金に美麗なる彫刻を施したるもの、或は金臺を以て象嵌を行ひたる高彫のものなどは殊に上等優美の流行なり、之に次いでは丸彫の透かし、又は飾玉を主として腕を極めて細くしたるもの夏季の使用に恰適す、されど此等は藝者、藝人のやからに多く玩ばるゝなり、

巴里流行

其他に最も愛用さるゝ物は、十八金か二十金位の指環にして、最下直十圓よりあれば從て需要者も澤山なり。

眼鏡は、玉を水晶にて作り、蔓を白金と、金交りに爲たるもの最上社會に流行す、殊に蔓の四ツに折れ得るものは携帶に便利なりとて重寶がる人非常に多し(價　十五圓より二十圓)其次に十八金二十金の蔓を愛するは中等なり、此の外一般に珍重さるゝものに於ては、九金、十二金、十四金(價六圓以上)の內に最盛なる勢力を有す。

雙眼鏡の極上流行はアルミニユームの黑塗縁、細長形のものとす(價百圓內外)、同じくアルミニユームの小形にて六枚玉より十二枚玉に至るもの(價十五圓以上四十圓以下)、旅行用及觀劇料に供して程善ければ

之が使用者頗る許多なるを見受く、此外ニッケル綠（三圓より十五圓）のもの、安直なる爲め通常の人に汎く携帶され居る狀勢なり、（以上總ての定價は天賞堂にて聞き合せたるものに依る）

沈香木と堆朱の櫛

目下貴族社會又は意氣と張とを衒ふ贅澤社會に見受けらるゝは沈香木と堆朱の櫛なり、沈香櫛は伽羅沈香と並び稱せらるゝ名木を挽き桐製のやうに塗色をつけず生地のまゝ之に淡泊と昇龍錦の模樣又は古代牡丹唐草等の蒔繪を施したるもの、堆朱は今日一般行はるゝ所のわざ／＼塗りて製造したるものと違ひ、蒔繪師が多年蒔繪を業とする間に、不知不識の間に積り積りて一塊の堆朱となりたるものなれば、其質最も自然の趣あり從つて其生地に面白き色合あり、之に古代模樣を彫刻したるもの、右二品孰れも高尚にして趣味あること當時他に類なし、價は沈香木製中挿とも六七圓、堆朱は八九圓なりと聞く。

雜錄

婦人嬌風會事業（三）

ウイラード女史

其命名

禁酒軍の婦人等千八百七十四年に會集せし時彼等は其事業を整頓して永續すべきものとなさんと計りき而して先づ起りし問題はこの新たなる會に附するに如何なる名を以てすべきやのことなりき

第一會は全然婦人より成り立ちぬ、そはもし男子も入りて共に協議を凝らすとならば彼等が議事法慣例の大なる智識及び彼等が攻進の性情は忽ち婦人を後邊に押し遣りて婦人が經驗より解得すべき力を剝ぎ取り後日世界をして性情行爲共に純潔の高度に到らしむべきが爲め眞に男子の其役者となるべきとに妨げあらんを恐れてなり

『節制』（日本には婦人嬌風會と名づけ居れど英語を直譯すれば婦人キリスト敎主義節制協會と云ふなりその心して以下讀給へ）なる語は理の當然として命ぜられぬ、これ凡ての善きものは節用し有害なるものゝ或は如何と見ゆるものは全く廢するの目的を以てなりしな

り、而して今や即ち酒精、亞片の賣買、妓樓、博奕等は律令の下に全く禁制せられんに至らんことを勉め尙ほ勞働問題には眞正の保護者となり且つ議場を通過して法となるべき凡ての議案に婦人の着實なる勢力の用ひられんが爲め即ち婦人撰擧權の主張をも合意するものとはなれり

協會なる語は宗派の垣を打ち超へて人生の廣き公道に歩み出でたる禁酒軍從軍者には新らしき意味を含むものとなれるなり、宗派とは人爲の域標に過ぎざるを以て禁酒軍の婦人等は到る處新敎、天主敎或は異敎徒にかゝはらず誰にもあれ彼等が旗下に集ひ來りて扶けを乞ふの人をば雙手を擧げて喜び共に加盟せしむるの意なりしなり人生に益あることゝ信じて全心を捧げたるこの事業をば「聖餐式のパン」の如く各人に分配するは己等の義務と思ひしなりそは誰にてもこの整頓せる善事業の環內に入り來る者は必ずや「我れもし擧げられなば萬人を引きて我に携へ來らん」とのたまへし救主に近づかざるを得ざるに至るべきを信ずればなり

唯だ異議のありしはキリスト敎なる語に關してなりき或人はもし我等この語をして我等の會名に冠せしむるとなればユダヤ人を除去せざるべからずと云ひ或人はその恐れなしとなし又或人は曰けらくもし今波荒き大海に漕ぎ出でんとする我等が船の檣頭にキリストなる語を飜さば我等に從ふ者は少からん宜しくこの語を附せざるに如かずと然れども大多數の望みは敢て從ふ者の多からんことにあらず從ふ者の品質のよからんを望むなるが故遂に決議してキリスト敎主義なる語を冠し今や即ち皆同心してこの語の下に事業を運ぶに至れるなり

會の格言

は「神と家庭と自國の爲め」といふなりこれは一日我が醒めし時思はず浮びし語なりしがシカゴの地方支部

に用ひしめしに忽ちイリノイズ洲の洲會に取り立られ後ち合衆國婦人矯風會の採用する處となり遂に「自國」たる語を「各國」と書き變へて萬國婦人矯風會の標題たる格言にはせられしなり

徽　章

千八百七十七年シカゴ「ファルウェル、ホール」にて開かれたる合衆國婦人矯風會公會に於ては用ゆべき徽章に關し幾多の議論ありし或は王者の色なる紫を撰み或は合衆國の旗印なる赤白藍を採らんと云ふもありき此の議論紛々の最中ニユーヨーク洲ブルークリンのマルガレツト、ウンズロー孃は獨り起て我等の徽章として用ゆべきもの白レボンに越すものなき所以を滔々熱誠を以て演べられたり孃の言孃の意誠に萬人を動しければ孃が所說忽ち採用せられたり

稚　足　姬（口碑解說）

稚足姬は皇女なり雄畧帝の三年阿閉臣國といへるもの誣奏して曰く稚足姬は廬城部連武彥と通し已に孕めりと武彥の父枳莒喩これを聞きて禍の家に及はんことを恐れ武彥を廬城河のほとりに誘ひて殺せりき帝聽て姬を案問せられつるに姬覺へなきことなから自らいひとくこと能はす且つ武彥の寃死を憐みなく／＼起て神鏡をとり懷にして五十鈴河上に至り鏡を埋めてのち自殺す帝人をして姬を求めしめ河上に至れば虹霓の蛇に似たるを見訝りてみれは神鏡と姬の屍なりけり即はち體を驗むるに孕めることなかりしかは人々惜しみあへり

盂蘭盆の贈物

物價騰貴のため昨年より價廉ならざるは詮方なし左に盆贈物の相場を記す

●砂糖　盆暮の進物としては第一なりザラメ一斤上

等十二三錢、白糖一斤十二三錢、和糖一斤上物十三四錢止り、袋は一枚一錢五厘より五六錢まで

●素麵　長を切りたる方が一寸いきに見え代價は一把一錢五厘より三錢まで此外干温飩、氷蕎麥等もよし

●葛麵　一箱十錢以上種々あり此外白玉粉、道明寺干飯、葛、干わん、ポテート葛等もよし

●もろこし粉　一斤袋入七八錢以上種々あり

●氷砂糖　一斤十五六錢より

●角砂糖　一斤三十錢位は上物

●コーヒー入角砂糖　小箱入は十五錢位よりあり

●氷蜜　甘口にて一本十六七錢より

●壜詰鑵詰物　福神漬、昆布佃煮、海苔品川煮、紫蘇、ゆかり、朝倉煮山椒等にて十五錢以上

●香水　上流より花柳社會向にして堅氣の家へ進物としては直段が分らずして担の方なり小壜にて六七圓より一圓位まであり

●匂ひ袋　藥店へ注文して直段は好み次第なれど一包三四錢位のものは丁子と甘草位の粗品なり

●焚香　京都製が見えも品もよく價も割に安し

●石鹼　箱入もあれど一個十錢位より三ッ入五十錢位が上流の常用向なり

●ハンカチーフ　白絹又は縫にて高價のものあれど重寶なるは一打廿五錢位より三十五六錢の品なり

●西洋手拭　汗ふき用の小形もあれど一枚三十錢乃至五十錢位が遣ひ物に宜し

●竹夫人　竹製の長枕にして夏用の枕には氣のきいた物なり價は三十錢位より

●空氣布團　先方の温泉行を當込みて重寶がらるゝ品なり廿五錢以上よりあり

●水呑コップ　一個十錢位より本みがき上物五十錢位なれど中等物は一打八十錢位

●西洋蠟燭　一寸見もよく奇麗にして西洋の盆じみ

て妙ならん十二挺三十錢より三十五錢

●下駄　盆の遣ひ物としては重寶なれど二三年以來高價となりたれば見付一圓以下の品は贈物と爲し難からん

●衣紋かけ　價安くて至極重寶がられる品なり一本下等一錢五厘並三錢位

●團扇、手拭　團扇は上物百本十圓位中等五六圓下等には限り無きが如し手拭も形を別にして一反並物四十錢、上物は九十錢にて兩方共形下繪に好み多ければ別に其價を要す

歌苑

殘花　和田　むらひ子

花にあかぬ人のこゝろをあはれとや
櫻か岡にのこるひとえた

卯花

飽かさりし春にわかれを卯の花の
かきねに今日はなくさまれつゝ

夕郭公

時鳥この夕月夜をかしきに
まちえてきかはうれしからまし

更衣　川部かう子

折につけてうつるこゝろもけさはなほ
ぬきかへまうき花そめのそて

朝新樹

櫻木の若葉のつゆもこほれつゝ
みつ枝すゝしきあさほらけ哉

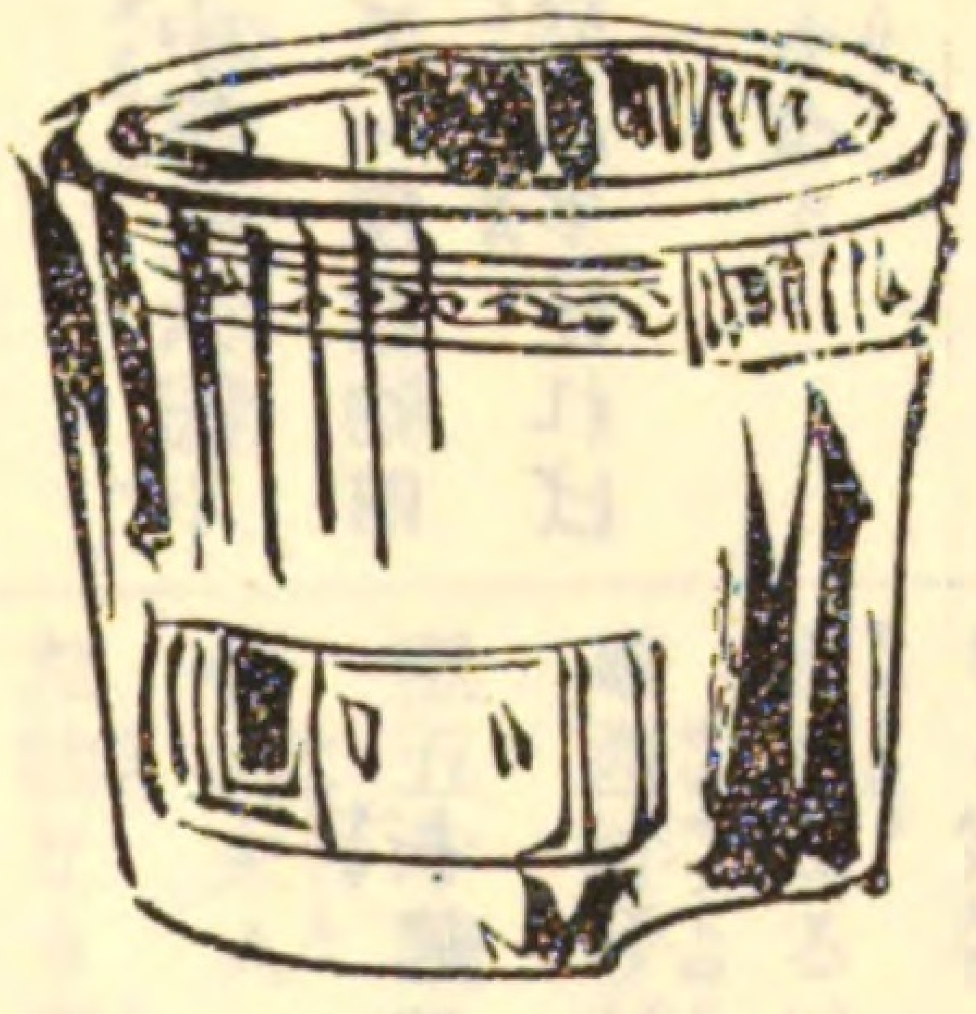
待郭公

ほとゝきすいつをまてとかたち花の
かをる夕にしのひ音もなし

交詢

◎第八問（横濱辨天通淡水君）狂犬、蝮蛇等に嚙まれし時の急治法左の如し、狂犬又は蝮蛇等の毒氣を有する動物に嚙みつかゝる時は、其局部に劇しき炎症を起し皮膚腫起して灼痛を起し體温昇騰し甚だしきは毒氣全身に彌蔓し死に陥るものあり、或は一足一手を切斷するに至る、必らず忽諸に附すべきものにあらず、是等の咬傷を受けたる時は直ちに醫師の診斷を受くるは勿論なるが醫師の來るまでの處置は、其傷部の上下を堅く縛り、介者又は本人の口を刺傷部に當て數回血液と共に毒物を強く吸出し、其唾液を吐き、而して後火箸又は編針の頭を紅く燒きて創面をやくべし、斯くし置く時は醫者の來ること遲くとも後悔することなし、但し毒を吸ふたる口は「ブランデー」酒又は冷水を以て嗽ぐべし、序に記す蜂、毒蛛、蜈蚣等に刺されし時は、直ちに其部を撿して針を拔き取り、其あとにカンフホル若くはアンモニヤを塗布すべし、

◎第九問（朝日山某君）食物の澱粉質、脂肪質、窒素質、蛋白質等の御問、此答は本號家政欄『壽命と食物』を一覽せらべし



田舎のこんろ

◎第十問（長野今井君）海邊を離れし不便の土地にて海水温湯を行ふには、水一斗に食塩四合乃至五合の割合を以て調製し、一旦沸騰せしめ適度の湯加減にて浴し、入浴後は躰體を摩擦すべし、すべて鹽湯は天性虚弱の小兒に効多く又感冒、リウマチス等を豫防するに有力なり、

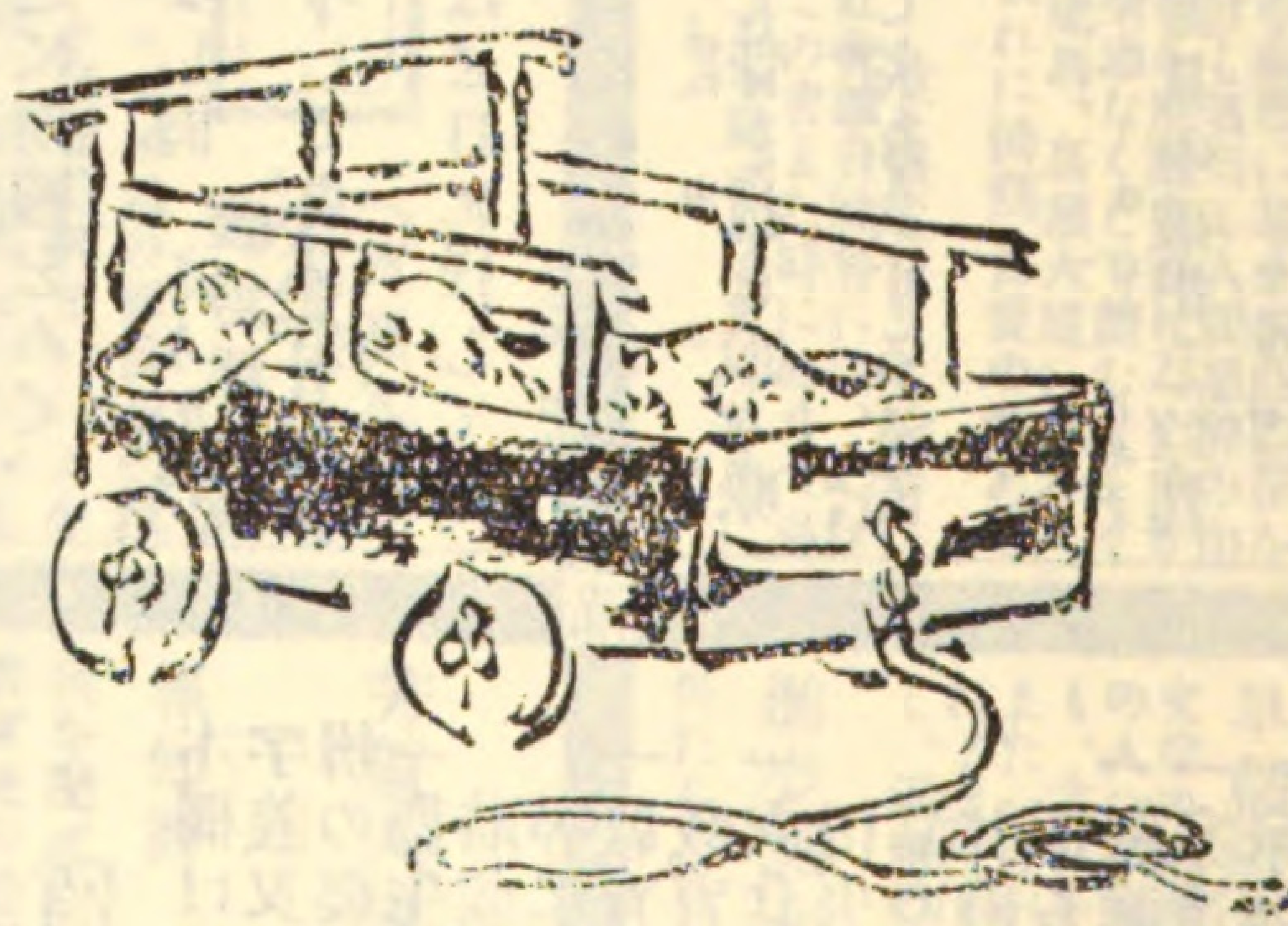
◎第十一問（丹後北濱君）鋼鐵側の時計は堅牢なれ

ども「プラチナ」の實用なるに如かず、詳細は本號社交一斑流行の栞を參照あるべし、

◎第十二問（本所たが子君（）改良竈及水漉器に就きては次號家政欄にて答ゆべし、

◎第十三問（神田苦悶君（）目下蚤の跋扈時代にて孰も大閉口御同前に存候、一般に流行する㊇ののみよけ（インセクト、ホウダー）も効力有之候へ共蒲團夜着等に白粉點々して氣味悪がる人も有之候が他に良方便も無之、先づ家内を清潔にし掃除の能く行き届く時は、夜間の襲撃少かるべく候、破損なき澁紙、金唐革の上に寝床を延べば、蚤の襲撃に餘地なし、但し澁紙は座敷一ぱいに敷きひろげ隅々まで行き渡り、蚤の這ひ上る道を防止するは、此苦悶を避くる一方便にて此法は經驗の上効力有之候、

◎第十四問「麹町ＯＮ君（）各種浴湯の温度左に答ふ、海水浴は攝氏二十一度より廿五度、華氏七十度より七十七度、微温浴は攝氏二十六度より三十度、華氏七十九度より八十六度、温湯浴は攝氏三十一度より卅五度、華氏八十八度より九十五度、熱湯浴は三十六度より四十度、華氏九十七度より百〇四度、



田舍の乳母車

◎第十五問（京橋銀座君（）支那料理にて龍蝦球（ロウホウキウ）と言ふ料理法は伊勢蝦の殻を去り、其肉と胎子と腦漿を混同にして庖刀にてたゝき、之に食鹽少量を加味し、丸めたる上に鷄卵の白質をかけ、豚の油にて揚げるなり、隨分味よし、

◎第十六問（芝高輪好釣君（）時下鯖釣の好時節日々

脚榻にて澤山の獲物可有之と存候、扨鱚の最美料理御尋問、鱚は大低三枚に卸して巻か或は結びて椀盛、茶椀盛の種につかひ候が、これは餘り平凡と相成、我家にて實驗致候料理法は三枚におろし之に薄鹽をあて、焼きて淺草のりを火どりて細に粉となし肉へふりかけて食へば頗る風味を覺候又三枚におろして皮を去り葛粉をつけ庖丁のむねにてたゝき一日ほど日にほして焙爐をかけて千に切りて食する白髪きすといふ料理法も珍らしく候、水にて能く洗ひひらきて骨を拔き取り味淋と醤油を和したるをつけて温火にて炙き食するも面白く候、

◎第十七問（小石川小林君へ）木製器具の破損を修覆するには漆若しくは膠も宜しけれど素人には出來難き場合なしとせず、殊に漆の如きは其氣に感染するの恐あり、膳、箱、煙草盆等木製一切の修繕藥には麩の種第一なり、そは價廉なるものにて麩屋に行けば容易に求め得られ且つ素人にても容易に使用出來得るなり、試み用ゐ玉へ、

質問規則

本欄は家庭の實用に資するの目的なるを以て字義又は專門の學術技藝等に關する事件は答辨の要なし

一衛生に關する事譬へば小兒養育、養育の具、時候の衛生、疾病、治療法、藥劑、病院、看護等に關する質問

一敎育に關する事譬へば小兒敎育、敎育書類、敎育の品具、學校等に關する質問

一衣食住に關する事、必用諸道具又は臺所品の得失善惡、購買法廢物利用、素人料理、食品の購買法、其得失善惡、衣服の購買法、其得失善惡、衣服の取合せ法、時々の流行等即ち簡易生活及家事經濟一切に關する質問

一家庭的手藝に關する質問

一家畜又は園藝等に關する質問

一家庭理財に關する事譬へば貯金、銀行、保險等に關する質問

一職業に關する事譬へば內職又は歸入的職業に關する質問

一其他家庭實用に關する諸種の質問

最新刊書發賣

社會百方面

定價十五錢
郵税四錢

反省雜誌評　例の乾坤一布衣氏が鋭細の視察に基き婉曲の筆を以て社會暗黒の裏を描寫せし者荀も人間惡弊の由て起る所を察し、萬斛の血涙に堪へず是れを洗滌改進せんとするの仁人志士誰れか一讀を惜む者ぞ、又た斯志なくして讀むもよく好奇心を滿たすを得ん、更に願ふ所は輕裘肥馬、高樓大廈に住み人間痛苦の那邊に有るを知らざる人に示し彼れに憐憫仁愛の意あるや否やを試み見んか

文學界評　社會の裏面を寫したる必らずしも盡したりと云ふにはあらずと雖も、今の中等社會讀書社會には、これ等裏面の事情を知らざるもの多ければ、この書また時に取りて必要なるものなり。松原氏は、この種の方面に力を致せり、更らに奥に入りて微を穿たば益する所少なからざるべし。

徳富健次郎著
十二文豪第十卷

トルストイ

（肖像入）
定價廿五錢
郵税四錢

都評　徳富健次郎の著、露國の文豪トルストイ伯の面目を清雅の筆にて描きたり由來稍々厭ふべき民友社調とかいふを放下して言文一致躰にて書れたるは文字の爲に文意拘束の弊を去りて意到り筆随ひ辭句の明暢なる讀者の尤も喜ぶところなるべし

山陽評　目下文界の明星とし其名球上に遍き露人トルストイ伯を説明して餘蘊なきもの文躰は一種新奇なる言文一致を用ゐ微に入り細を極めて遺憾なきに庶幾し十二文豪中の傑作と云ふべし

幸田露伴序
角田柳作著

井原西鶴

定價廿錢
郵税四錢

早稲田文學評　西鶴が論評の一冊に纏まりたるものは、此の書をはじめとす、一讀して第一に目につくは文章の暢達なるにあり、開卷面白く讀過せしむるに足るべし、西鶴の人物を論じて主我的の人なりといふ、或は當たるべしといへども、之れを殆ど唯一の論據として、かるが故に對境に同情し得ず、またかるが故に作に想像の分子乏しといふ、偏なるの嫌なきか、されど之れも一面の見かたなり、世の文學に志あるものは一讀すべし、近刊の史傳中おもしろく讀まるゝもの、此の書其の一なり、

進歩黨々報　井原西鶴。其名を聞かば則ち其人を想はむ、シカモ眞に其人を識るに足るべきは　此書恐くは嚆矢たらん、著者の筆亦能く西鶴を寫すに適せり

芳賀八彌著

徳川家光

附由井正雪
定價廿五錢
郵税四錢

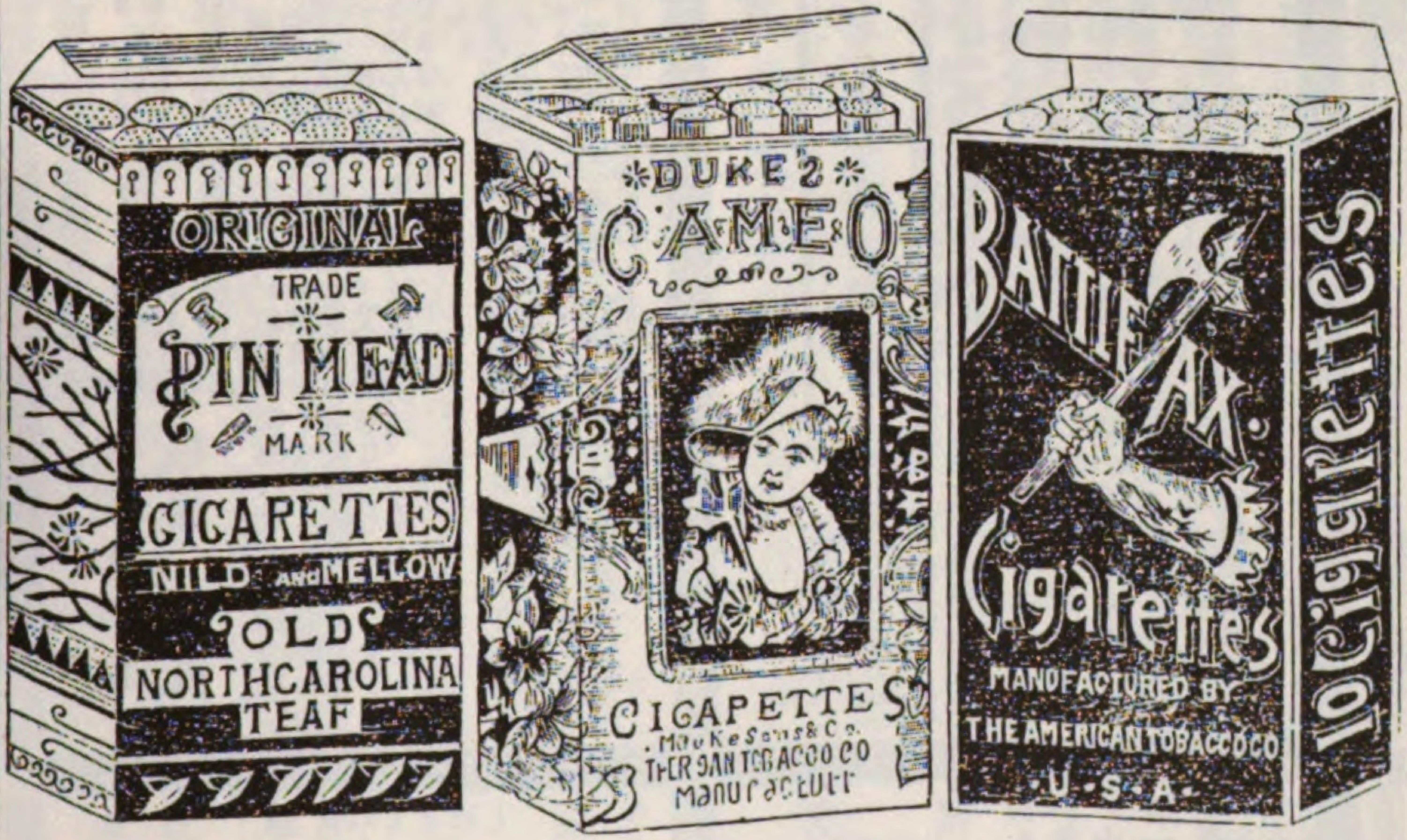
報知評　家康秀忠の後を受けて徳川氏の霸業を大成したるものは家光なり彼は其父祖の如く兵馬の檻に據らずして諸侯を壓せしを見れば彼れも亦た尋常の庸主にあらざりしが如し其書家光の性質及び其感化等を叙して詳に且つ趣味あり卷尾附するに由井正雪を以てす

早稲田文學評　通讀したる處、未だ取り出でゝいふべき程の議論も見えざれど、幾多雜駁なる材料を綜合し來たりて、間々背て大膽なる新案を試みたる所など、初陣の筆ながらもその才筆を窺ふに足れり、吾人は他日著者が更に愼重精刻なる筆を揮へる史論に接せんことを期望す

民友社發行

舶來煙草直輸入商

バットルアツキス	カメオ	ピンヘッド
賣價七錢	賣價九錢	賣價四錢



紙巻	紙巻	トルコ紙巻	紙巻	刻莨	刻莨	刻莨	刻莨	刻莨	刻莨	刻莨
エンチヤンテレス	ピオー	ルキゾール	スター	ゴールデン	プリシラー	ショウカー	ジプシー	バタフライ	カメオ	リッチモンド
百本入 廿本入 十本入	十本入	十本入	十本入	二匁入	二匁入	二匁入	二匁入 四匁入	四匁入	四匁入	二匁入 四匁入 八匁入

東京新橋 **江副商店** (電話本局九〇五)

(明治廿五年九月十四日遞信省認可)(明治三十年七月十日發兌)
東京市京橋區西紺屋町二十六七番地 株式會社秀英舍印行